

仏教思想の「皆の命が輝く」幸福観
— その2: 仏法・人間医学、個人・社会 —

観音堂堂主

伊藤義貫

みんなのいのちが輝く社会経済研究会

2021 年1月

全体の序

『仏教思想の「皆の命が輝く」幸福観』は、3本の論文(その1、その2、その3)から構成されています。「その1」は、後述の「四諦」のうちの「苦諦・集諦」から、「その2」は「滅諦」から、「その3」は「道諦」から構成されています。この3本の本論文を通じて、仏教が教えてくれる幸福観を明らかにしたいと考えています。全体の概要は、以下のようになっています。

ここで提示する幸福観は、樹木に例えると根っこの部分に値するもので、個人的な千差万別の幸福観ではなく、全ての人間に享受された「**心と体の本質**」と「**自然生命の真理**」から教示された幸福観を考察したものです。

それは、「人間とは何か」と「如何に生きるべきか」という問いに繋がっており、仏教の生命観の真理に教示された智慧と慈愛の幸福観です。これは、全ての地球市民が共有出来る普遍で平等な幸福観であり、幸福社会創造の理念にも当てはまると考えます。

その幸福観の作成手順は仏教でいう「**四諦**」(したい)のプロセスに基づいております。

「**四諦**」とは、仏陀が人を救う為の要領を教示した智慧であります。それは、医者が患者を診察して治療する手順と同じです。それに基づいて幸福観を、皆が幸福を実現出来るための手引き(ガイド)と成る様に説明します。

その内容は下記の様になります。

(**苦諦**) — 現象世界に囚われて、人や物などの事柄の現象の移り変わりに惑わされ、それに執着して苦悩していること。(患者が健康を理解せずに、好き勝手な生活をして病気に苦しんでいる状態)

「論文その1の幸福観の模索」の章を参照して下さい

(**集諦**) — 苦の原因は「現象」の事柄に執着し、事実を誤った判断をして苦しんでいるのだと気付くこと。(患者が生活の仕方が病気を作った原因だと知ること)

「論文その1の享楽観の幸福の短所・仏教観の幸福の依り所の自灯明と法灯明」の章を参照して下さい

(**滅諦**) — 現象の実体を悟って執着の苦から解放され、そして自由自在の悟りの境地を開くこと。(病気の治療法を理解すること) — 三法印の悟りに基づく、仏教思想の幸福像を明らかに描いて頂ける様に、この「滅諦」の「仏法の三法印」から創られる幸福観を図表にしたものを巻末に添付しています。

「論文その1の幸福に結びつく心の働き・論文その2の仏法から教示される幸福観・個人と社会の幸福観」の章を参照して下さい

(**道諦**) — 滅諦の悟りの境地を実現する実践法。

(患者に治療を施すこと)

「論文その3の仏教思想の幸福観の育み方—幸福人間創りの身心道・生活の実践法」の章を参照して下さい

以上ですが、仏教思想の幸福像を明らかに易しく描いて頂ける様に、この「滅諦の三法印」から創られる幸福観を巻末に図式に表示致します。この図式のキーワードは、「三法印の働き」と「心身への作用」と「三法印の幸福像」です。図式の詳細は「その2」のDP(ディスカッション・ペーパー)で判り易く説明致します。

因みに三法印を簡略に説明しますと、

「諸行無常」（一切の創り出されたものは、縁起による生滅によって常に変化する）

「諸法無我」（一切の創り出すものは、無尽縁起の環境条件に影響されて作用し、自由意志には非ず）

「涅槃寂靜」（一切の創り出された物や心は現象にて実在せず、ただ縁起の条件にて自由自在に創造される世界）

願わくば、これらの説明を通して皆様に幸福実現への「気付き」と「創造心」が^{もたら}されることを祈ります。

解説

- (1) この幸福観の趣旨は、仏教の専門的教学の説明には重点をおかず、今日の人間社会の課題や人生観に重点を置いて、幸福実現のために「仏教思想の視点」からどのような教示が提示出来るのかを主体にして纏めました。
- (2) 地球市民の皆様にご共有して頂けるように、幸福観を「仏法の生命真理」と「人間医学」と「自然科学」を結びつけ、それを判り易く「用語と順序と比喻」を用いました。
- (3) 当研究会の名称「みんなの命が輝く社会」実現に結びつく内容としました。
- (4) 仏教思想をもって「人間と社会の平和創り」の道を確立するために 50 年間米国で研鑽して来た尊師飯島貫実先生の仏教平和観を中心に文面に取り入れております。

地球市民が幸福に成るためには最終的には全ての人が住みやすい社会にしなければなりません。それは、個人と社会は「森の植物と動物の関係」で相互関係が比例した条件にあります。故に、皆が共通意識をもって共生しなければなりません。そのためには、地球市民の皆が共有出来る社会像（理想像）が必要です。その際に、理念とすべきは人間として共通した生命観や自然観を基に摂理に則った普遍的であり公平で平等なものでなければなりません。その意味で、ここで提唱する幸福観はその意図とする価値観に値するものと考えます。

私達が提唱する幸福観が地球市民の明るい未来の布石と成って貢献出来る事を祈ります

注1. 四諦(したい、梵: catur-ārya-satya チャトゥル・アーリヤ・サティヤ)または四聖諦(ししょうたい、巴: cattāri ariya-saṅgāni, チャッターリ・アリヤ・サッチャーニ、4 つの・聖なる・真理(諦))とは、仏教が説く4種の基本的な真理。苦諦、集諦、滅諦、道諦のこと。

- ・苦諦(くたい) - 迷いのこの世は一切が苦(ドウッカ)であるという真実。
- ・集諦(じったい) - 苦の原因は煩惱・妄執、求めて飽かない愛執であるという真実。
- ・滅諦(めったい) - 苦の原因の滅という真実。無常の世を超え、執着を断つことが、苦しみを滅した悟りの境地であるということ。
- ・道諦(どうたい) - 悟りに導く実践という真実。悟りに至るためには八正道によるべきであるということ。

苦諦と集諦は、迷妄の世界の果と因とを示し、滅諦と道諦は、証悟の世界の果と因とを示す。

仏教思想の「皆の命が輝く」幸福観

— その 2 : 仏法・人間医学、個人・社会 —

要約

このテキストは自分が真の幸福になりたい！とか、

自分のそばにいる不幸な人を助けたい！という気持ちを持った人のために書かれたものです。

すでに世界中で書かれている「幸福論」を読まれた方も沢山おられると思いますが、そこで経済学や心理学を駆使して語られる幸福論と仏教思想をベースとする幸福論とは、かなり趣の異なるものであることを予めご承知ください。

仏教では先ず大自然の摂理の洞察と、人というものを本質的に理解する努力を通じて、学習者自らが幸福感に満たされた人間に育つことを目標としています。そのうえで初めて周りにいる人々を幸せの境地に導ける人に育つのです。

苦しみや悲しみの感情の原因を他に求めるのではなく、自らの心の中に住み着いた限りない欲望や怒りがその根本原因であることに気づき、知識だけでなく、実践のみがもたらすことの出来る悟りによって、幸福にたどり着く、長くて厳しい心の修行であるといってもよろしいかと思います。

キーワード

- ・仏教思想の幸福観の趣旨
- ・仏法の万人共有性の略説
- ・仏教が教示する幸福の源泉
- ・仏教思想の個人と社会の幸福観の概要

〈 目次 〉

仏法と人間医学が教示する幸福観

- 1 仏教思想の幸福観の 4 つの趣旨
- 2 地球市民が共有しやすい仏教の幸福観
 - 2.1 仏教の「法灯明」から万民が共有できる教義の略説
 - 2.2 仏教は科学的要素がある共有性の宗教
- 3 仏法から教示される幸福の源泉
 - 3.1 苦悩を開顕した幸福観
 - 3.2 諸行無常法の幸福観
 - 3.3 諸法無我法の幸福観
 - 3.4 涅槃寂静と諸法実相の法の幸福観
 - 3.5 結び
- 4 仏教思想の個人と社会の幸福観の概要
 - 4.1 個人の幸福観
 - 4.2 幸福観の倫理と質
 - 4.3 仏教思想の幸福社会像
 - 4.4 仏教思想の幸福経済
 - 4.5 仏教思想の地球市民経済理念
 - 4.6 まとめとして

まとめ

仏法と人間医学が教示する幸福観

1 仏教思想の幸福観の 4 つの趣旨

ここでは、仏教思想の幸福観について説明を致しますが、その内容をご理解いただくために、まず本節において、その趣旨を述べさせていただきます。本 DP のテーマには、4 つの趣旨があります。

(第 1 の趣旨：仏教と人間生活)

どんなに教えが高邁で素晴らしくても、それが人生や社会の指針となり、人々の救済や幸福に結びつくものでなければ現実的意味はありません。

仏教は、単なる心だけを救う教えではなく、**心と体を同時に揃えた身心一如の実践の**人間丸ごと救う教えであって、単に深遠な知識欲を満たすためのものではないのです。

それは、開祖の御釈迦様が王子の地位や妻子から離れて出家修行した目的に見る事が出来ます。

王子であった御釈迦様は、華美快樂に耽る宮廷生活に虚しさと無常観を抱きました。また「四門遊観」と云って、東西南北のそれぞれ四つの門より城外に出遊しました。その際に眼にした老人、路上に臥している病人、人の死の出会い、それは現在健康で何不自由なく生活している自分ではあるが、やがて自分が辿る未来の姿に他ならないと観ずるとともに、このような事に目を伏せてただ楽しみに酔いしれる在り方に厭世の念を一層深くしました。そして、四つ目の門より出でた時に静寂温雅にして苦悩の相の無い清僧に出会って心打たれ、菩提心を起こして王子の座を捨て出家し求道の旅に赴くのです。それは、この様な人生に於いて避けがたい肉体と心の苦悩を克服する道を得て、自らと人々を救済するためでありました。故にそこから得られた覚りは、実に人間生活に密着した教えとして世にもたらされたのです。そこが、「神の啓示から人を導く」キリスト教やイスラム教と違うところです。以上が、私達が苦悩から救われ、且つ、精神性が高く安楽な人生を送る為の幸福観が趣旨の 1 点目です。

(第 2 の趣旨：共有の幸福観)

次に、視点を変えて私達の幸福の実感について考えます。

貴方は「この国に産まれて幸せですか？」と質問されたら、どんな返答をなさるでしょうか。

日本の幸福感の現状を色々な報道などから推察してみますと、人間は皆、何かしらの幸福を求めているにも拘らず、現代の日本社会では、人生に夢を持てない人が増えている事に危惧を感じます。何故ならば、幸福感は人生の生甲斐であり、目的でもあります。もし、虚しいと感じる人生を歩む人が多くなったならば、それは、社会全体に暗い影響を及ぼすからです。

この虚無的な社会と化した背景を鑑みますと、現在の社会が科学や技術は飛躍的に進歩し、人間の感覚の及ばない宇宙や素粒子の深い所まで科学的知見が展開されているのにも拘らず、人間の精神面については、旧態で進歩が見られず、寧ろ、科学技術の進歩に伴って、心はいつの間にか疲れ果て退化しているのではないのでしょうか。又、親子関係の心も、潤いのない砂漠化状態の家庭が増え、更に社会に目を向けると孤独な方も多くなっております。加えて社会全体がモラルの低下傾向にあります。

この様な状態に陥った精神的な根本要因は何でしょうか。その一つに、私達の人生で「最も掛け替えのない大事な物は何か」と云う事と「自分自身の尊さ」について、理解と自信が持てない事が挙げられます。その様な社会にこそ、「仏法と人間医学から教示される幸福観」が必要なのです。

この幸福観は、「仏法」が自然科学と共通性を持っていることから言えるのです。

自然科学は「究極的な目的である**なぜ (Why)**」を一端棚上げにして、先ずいかなる状態で、**どのような (How)** 現象が起きているのかを記述することと、どのような条件下で何が起きるかを記録し、それに基づいて因果関係を分析しようとしています」(参照 Wiki) ダライ・ラマ法皇 14 世は、「仏教とは、心の科学」である、と表現しました。心の科学仏教は、澄み渡る意識と科学的観察姿勢を以て、物事をありの儘に観察・洞察・分析し、その因果関係や関わりを解き明かしたものです。さらに覚れる者(仏陀)の

視座からは、その背景には、慈悲があり、それを表現し具現化する智慧があります。諸現象の根底に愛(慈悲)が、あることは、今日複数の科学者の述べるところです。

このように「仏教」は、自然科学的視点を持って生まれたが故に今日の自然科学知見にも親和性が高く、それが教示する幸福観は、文化や思想の枠を越えて、地球市民にとって「共有の幸福観」であると云えます。アインシュタインが、宇宙的宗教と呼ぶ所以です。この事が、このテーマの趣旨の第 2 点です。

「共有の大切さ」を例えてみましょう。現在の世界の課題を解決する為に、「社会改革」の創造を企画するとした場合、地球市民の理想社会像(ビジョン)が共有出来なければ歯車のズレが生じ、和合し成立することが出来なくなります。

2008 年 4 月 18 日にローマ法王ベネディクト 16 世が、この事例に関連した提案を国連で演説したと、時事通信が報道しています。その内容は「世界の諸課題である温暖化、貧困、食糧、紛争等々の問題は、世界を構成する国々が他国から影響を受け、又他国に影響を与える『因果関係』から離れる事は出来ない事を考慮した時、各国に『共通な行動基準』を作り、各国はこの基準に従った行動をなさい。そうしなければ、国際秩序は保てなく成る」と云う提案でした。故に、本 DP では、地球市民が平和な生活・社会を創造出来る様に、「共有する幸福観」を提唱するのです。「共有の幸福観」は人為が成すのではなく、本来、大いなる天地の生命体から享有している幸福観なのです。この事は後段で説明致します。

(第 3 の趣旨: 普遍の幸福観とその実例)

テーマの趣旨の 3 点目は、ここで提唱する幸福観は、個人の我見や権力や物欲などの都合で左右されるものではないと云う事です。この宇宙の生命世界は人智の計り知れない偉大なる「生命活動の法則」によって展開されております。この見えざる力の無限の法則を仏法に当て嵌め、生命法則で創られた生命の結晶の人体の構造と機能を人間医学に当て嵌めた時、双方から教示される幸福観は共通しており、故に、それは仏法と人間医学の「人法一如」の「普遍の幸福観」と云えます。

重ねて云えば、宇宙生命界のマクロ的真理と人間の構造と機能のミクロ的真理から教示される共通した「一如の幸福観」は、人類にとって「普遍の幸福観」又は「生命の摂理の幸福観」であると云う事です。この幸福観は万人の心身を癒し、蘇生の力となり、幸福の道標と成ります。故に、この幸福観の有無が人生の幸、不幸を左右します。

「普遍の幸福観」の「普遍」について「親子の愛」を一例に取り上げてみましょう。理学博士高木由臣教授や遺伝子学の村上和雄教授の説から考えると、生物の細胞学より観た「親子の愛」は、寿命を持つ生物が、種を継続する仕組みの「有性生殖」に基づく受精の結合の過程で、遺伝子ゲノムにより体の構造と機能を規定する親の性の個性が子に造られ、その機能の中の種を残す生殖細胞の中の遺伝子ゲノムの働きの一つが「親子の絆」という本能と成って、「親子愛の幸福感」に成ると考えられるのです。故に「親子の愛」は本能ですから、たとえ親に対する記憶がないような子でも「親を恋慕う」様になります。

その実例を紹介します。三重県の桑名市に 500 年の歴史がある名刹の専光坊の住職で、宇佐美秀慧老師と仰る念仏禅の名僧が刊行された「文集説法第 64 号」(平成 23 年 10 月)があります。その中に掲載された実話の概略を説明致します。

「京都の三上和尚様が某病院で説法された後に、院長先生から『病室に居る一人の少年に説法をして頂けないか』と頼まれた。

その少年の生い立ちは、母は、天涯孤独の娘で、ソバ屋で働いていた時、出入りしていた若い大工の子供を身篋った。しかし、その大工は何処かへ逃げてしまった。娘は一人でお腹の子供と一緒に頑張って生きて行こうと決意し出産したが、難産の後、産み落とすと共に亡くなった。その後、施設に入られていた少年は 12 才の時、ソバ屋さんが戸籍を作って引き取ってくれた。しかし 15 才の時、ソバ屋を飛び出して大きなお宮やお寺の下に隠れて住み、賽銭箱に手を伸ばして生きていた。やがて、悪事がバレて捕えられ、取り調べ中に、結核の二期だと判明し病院に収容されたのが一年前。その後、

症状は悪化してもう直ぐ死ぬ日も近い、と云うのがこれまでの経過である。

三上和尚様は可哀想になり、『足でも擦ろうか』と言って、優しく痩せ細った少年の足を擦ってやった。少年は『おっさんの手は女の手のように柔らかいなあ。和尚さんをおとつつあんと呼んでもいいか？』と言った。優しく痩せ細った少年の足を擦っている内に、しみじみと父親が恋しくなったのだ。『いいよ。わして良ければ呼んでもいいよ』。少年にしてみれば、生まれて初めて言う言葉である。気持ちが高ぶって中々声に出てこない。それでも、やっと『おとつつあん』と呼び、それから『おとつつあん、おとつつあん』と言い詰めであった。それから、安心した様に眠った。

やがて朝を迎え、三上和尚様は、少年から『もう帰るんだろう。その前に、俺に何か話しをしてくれ』と云われ、和尚様は蠟燭の話をされた。『人間はなあ、この蠟燭の様に火を灯し、我が身を削って、身も心も、そして、他の人の身も心も照らして生きる事が大切』と。少年は『他の人の為に生きる事など、もう直ぐ死ぬ俺には出来んことやけど、蠟燭に火を灯すことなら出来そうや。おとつつあん有難うな。今まで、院長の馬鹿野郎、殺しやがれ！』と言っておったが、もう止めた。今、思うと小言を言う人がある人は幸せや。ところで、おとつつあんは多くの人に話をするやろ。その時、津田と云う、どうしようもない奴と一晩話をした事を皆に伝えておくれや』。和尚は『判った。お前の事を皆や子供達に伝えよう』と言って別れたが、少年は『おとつつあん、おとつつあん』と泣き声で呼び続けていた。

そして、和尚様は院長室に行って報告をしていたが、その間に廊下の方からバタバタと足音がして宿直の若い先生が『只今、津田が亡くなりました』と報告した。その若い先生が話すには、いつも悪態をつく津田が今朝に限ってニコニコ笑っておったそうである。『津田、今朝は馬鹿に機嫌が良いなあ』と言って消毒液で手を洗って、さて診察と振り向いたら、もうこと切れていた。笑顔のまま死んでいた。『お前は気の毒な奴だなあ。可哀想に』と言い乍ら、少年の毛布を深く掛け直そうと毛布に手を触れたら、何と少年はその下で手を合わせていた』と話された。以上が、掲載された実話の概略です。

少年は、三上和尚様と云う御方に会った御縁で、「おとつつあん」と呼ぶ声を絆として、最後の一晚ではあったが、和尚様の心に灯っていた温かい灯火がポツと移り、灯されたのです。「衆生本来仏なり」「生きとし生けるもの、ありとしあらゆるものは元々仏である」と結んだ内容ですが、この文中に、母は亡くなり、唯一生きているであろう、未だ顔を見た事がない父に逢いたいと思う「命の本能」が生み出す「子が親を慕う」こと、すなわち「親子の愛」は、人間として共通の「普遍の幸福観」なのです。そして、この、幸福感の有無が、少年の心身に悩みを生じさせたり、あるいは蘇生とも成る事の実例です。明治天皇も御製に「天地に母の心があればこそ、母のみわぎの逞しき哉」と謳っておられます。これは、天地自然に流れている命を育む摂理の力を母心に例え、それが、母の愛情に化して「子を思い、挺身して捧げる姿」を表現したものです。

（第4の趣旨： 全ての人に享有されている幸福観）

世界の幸福度ランキング上位にある中南米のコスタリカで、ドイツの幸福研究家のマイケ・ファン・デン・ボーム女史が幸福感の実態を取材した著書で、ある家族が、「私達は貧しくて、お米や豆やバナナしかなくても、お金で買えない大事な家族の愛情があるから十分に幸福です。それはいつも一緒に暮らせて、助け合って喜び合えるからです。人は一人では幸せに成れません」と幸福感を述べております。これは、不変であるとともに、人間が本来共有している家族愛の幸福観です。

反面、経済大国で生活する日本人は、この言葉をどこ迄理解し得るのでしょうか。

いまの日本人は、物質的に充足すれば、幸せだと思い込み、あればそれが当たり前となり、その有り難さを忘れ、失ったらすべては終わってしまう、というような恐怖にとらわれて生活していないだろうか。

先にも述べましたが、仏陀は、現実の人生に横たわるさまざまな苦悩とそれを克服したほんとうの幸福を覚り、そこに至る道を示しました。それは、仏教徒であるか否かに関わらず、普く人類が持っている最良の可能性を表明したものにほかなりません。涅槃経という仏典によれば、すべての人に根本的に享有されている「仏性」という真の幸福の潜在力の存在が説かれています。私達は、このことを先ず自分自身に深く観察して感じてみる事が大切だと考えます。それに依って多くの気づきを得たその時には、自分や他の人々を育んで止まない大いなる愛の親心と多くの人々の愛恩に涙と喜びが湧いて

来ることでしょう。これは、仏性が、開かれた時の無上無比の幸福感や「敬天愛人」の幸福観に通じるものです。法華經という經典から観ますと「敬天」は、宇宙生命界に流れている目に見えない命を育む愛の力を、「妙法蓮華經の母と久遠仏の父」の親心と見做して敬い合掌をする心を示します。「愛人」の「人」は「仏子としての全ての衆生」であり、「愛」は「仏性礼讃と共生の菩薩行」の愛です。法華經は、この「法の母と仏の父と仏子の衆生」の究極の「親子の関係と慈悲の導き」を現わしております。

「この三界は皆我が有なり。その中の衆生は悉く皆我が子なり」 （「法華經第三」）

「何を以ってか、衆生をして無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得せしめんと」
（「法華經第十六」）

私達が生存している世界と私達の命は生まれながらにして幸福の潜在力を与えられ、導かれているのです。幸福観は革命のように新しく創られるものでは有りません。逆に、宇宙生命体に本来内在している愛・慈悲の働きを、自分の命に内在している仏性の声を通して開き現わして行くのです。それは、人智の不完全さと違って、完全な調和と持続可能な幸福です。そして、これらの事を理解して生活環境に当て嵌めれば、「お陰さま・勿体ないの「感謝の幸福観」のシンプルライフになることでしょう。西洋思想にも「plain living and high thinking」の思想があり、共有出来る事は幸福社会に希望が持てます。これ等の、今まで述べてきた趣旨を現わしたのが、「仏の教え（仏法）と人間医学から教示される幸福観」です。

2 地球市民が共有しやすい仏教の幸福観

（地球市民が共有できる幸福観）

これから述べることに就いては、この本を読んで下さる皆様方の心の奥に内在していることです。それから、如何に時代が変化しても、人間について「4 つの不変の真理」があることを踏まえて、人生を深慮しなければ成りません。それは、1 つー「人間は必ず死ぬ」ということ。2 つー「自分の人生に代役はない」ということ。（子供が病気で苦しんでも親は変わって挙げられない）3 つー「人生は一回限りである」ということ。（今日という日は二度とない）4 つー「自分という人間は過去にも未来にも一人しかない」（釈尊曰く「天上天下唯我独尊」）ということです。この「尊い命をどう生きるか」が大切なのです。この事に気付いて共有して頂き、皆様が一緒に笑顔で地球上の暮らしが出来ることを祈って、文を認めさせて頂くものです。それに因んで、仏教は過去の歴史に於いて、伝道布教の為に他国や他民族を侵略戦争で犯した事はありませんでした。それは、仏教の教えが万人の生命を平等礼讃して不殺生、非暴力の戒律を重んじているからです。この様な平和思想の元に幸福論を述べさせて頂きます。

その意味から、この章で述べる幸福観は仏陀の慈愛の伝言とも云えます。それは、新たに人間の都合で幸福観を創るものではなく、人間の生命とその生命環境世界から教示している生命の導きの声を、仏教の教えを元にして現した幸福観なのです。

それでは、始めにこの章の幸福観の土台となる仏法について簡略して説明致します。

2.1 仏教の「法灯明」の教義の略説

その1の DP に掲載してある「幸福に結び付く心の働き」で「自灯明」の説明をしましたが、「自灯明」の幸福の「自らの心を依り所とせよ」という論しを理解しても、それは未だ片目で歩くようなもので、片目で歩いたのでは自動車が来ても遠近の区別がつかず、危ない事になります。ここに、「真理を心の拠り所にせよ」の「法灯明」の論しが必要となります。つまり、「法灯明」によって、本当の幸福は何かが判断出来るからです。それは、人生の歩みの中で心と身体の悩みや人間関係の悩みなど、色々な人生

の波を受けて生きて行く過程で幸福を得る為の、「不幸原因の本因」と「真理の幸福観」の理解が得られるからです。それに依って、自分の心を、「今も後も楽しい」ものに出来るのです。この事が、「心の依り所」に「法灯明」を求める謂われであります。

仏教は「法灯明」の「真理を知れ」と「自灯明」の「仏の生き方を自らの心に見よ」の両翼の教えです。白鳥が両翼を羽ばたいて天空を滑走する様に、二灯明の両翼が人間に備わった時に、人間は仏陀と等しい自在無碍の幸福を実現することが出来るのです。

それでは、「法灯明」の「真理とは何か」について、仏陀は次の様に述べております。

「世尊は即ち為に、三句の法を説いて告げて曰く『賢者よ、諸行は無常なり。諸法は無我なり。涅槃は寂靜なり。是れを三法印と名づく』。」（律部毘奈耶第九）

ここで、「三法印」を整理しますと

（諸行無常）—— 「創られたもの」は『時間』と共に消滅してゆく立場からの真理

（諸行）—— 「一切の創り出されたもの」

（無常）—— 「一切の現われたものは消滅する」（一期生滅）

—— 「一切の現われたものは滅しつつある」（瞬々生滅）

（諸法無我）—— 「『創り出す心』が『空間』の一切を対象に何等かの影響を受与されている立場から見られている真理」

（諸法）—— 「一切の創り出す作用」（一切の働き掛け）

（無我）—— 「一切の現わす心は環境条件に影響されて自由意志無し」（無主縁起）

—— 「一切の現わす心の影響は縁起の関係によって形通りに且つ際限なく展開する」（不昧縁起）

（涅槃寂靜）—— 「無常無我の二法を確立し、一体感となった世界」（創られたもの・創り出す心の両面から見た縁起の世界）

（涅槃）—— 「現象の「有常・有我」を打ち消した世界」（完全なる無の世界）

（寂靜）—— 「涅槃によって顕れた生命本来の無限の自在と慈愛の世界」

それから、涅槃経には「一切の行は無常なり。諸の法は無我なり。涅槃は寂靜なり。是れを第一義と知れ」と説かれております。この中で「三法印」を「第一義」と表しています。そして、「法印」とは「仏陀が常に身から離さず大事に持っている真理の仏教の旗印」の意味です。それが、「諸法実相」（現象世界をありの儘に眺めながら、その個々の中に美しい仏性を観る世界観）の真理の基礎と成っており、更に法華経に至っては、究極に開顕して「一念三千の世界観」（全ての人、万物、自然国土が仏性を顕した幸福観に満ちた仏国浄土の世界観）となり、「完全な自由自在と慈愛の生命」の真理に極められます。

人間の心は、人間生命の本質と生命科学に準じて捉えられた所の生命観を重視した幸福でなければ

ば、人生と社会の色々な不安の波に呑み込まれてしまいます。それに応える為に、「三法印」を大乘的に開顕した「法華經の幸福観」に基づく、「仏法から教示される幸福観」を提示致します。

それは、不安や失望に遭遇しても、希望の道標となって、何人も平等に得る事が出来る幸福への道です。

2.2 仏教は科学的要素があり万民が共有し易い幸福観

現代社会は、自然科学の進歩によって「見える世界」の科学から「見えない世界」の科学の解析が著しく、「パラダイムシフト」と呼ばれる潮流の変化が起こっています。この事は、量子力学や遺伝子工学、細胞生物学等々の飛躍的な進展によって、仏教の世界観の実証に役立ち、仏教が一般的に理解され易く成りました。

例を上げますと「三法印」の「諸行無常」は「一切の創られたものは滅しつつある」と云う真理であるが、人も物体も「現象であって実在しない」と言われた時に感情的に素直に受け入れ難いものがあります。それは普段、人間が五官の小さい能力の感覚で判断しているからです。ところが、人体を科学的に分析して行くと体の物質は元素の組み合わせであり、それを更に分析すると「原子」から陽子、中性子そしてクォークと素粒子に成ります。その素粒子は、物とか事実と云うより、潜在性や可能性の世界を形成しており、形を持っていない事に成ります。(量子物理学者のハイゼン・ベルク説)そして、それが「消滅」と「生成」を同時に繰返して点滅しているのです。故に、人も物体も「現象」であって「実在しない」と云うのです。仏法が、科学の発展で明らかに証明されるのです。縁起の法(生起)の「自由自在」についても、「消滅」と「生成」(生起)の間に何等かの条件を与えれば、その通りに変化すると云う事で証明されます。更に付け加えると、この「消滅」と「生成」の作用は、但、環境条件に基づく作用であり、そこに「無我の法」の「一切の創るものに自由意志無し、但、条件によって創られる」の仏法も証明されます。

次に、「空即是色、色即是空」は、電子の激しい動きの様な作用が「あやふやな原子」を、あたかも個体の様にしている事で、この有様は元々空気である竜巻が激しい回転により剛体の様に振る舞って、物を破壊する怪物となり、そして一旦回転が止まると実体の感じられない「無害の空気」に逆戻りする様に「エネルギーと粒子」が渾然一体と成っており、その、極微の場を「量子真空」と云い、その粒子との関係を現わしています。

$$\{ (\text{量子真空} = \text{空}) \times (\text{粒子} = \text{色}) = (\text{空即是色} \cdot \text{色即是空}) \}$$

それから、「シューマン共振」といって、地球地表と電離層の間で観測される固定地場の周波数 7.8 ヘルツは「地球の脳波」と云われ、人間の覚醒と入眠の境目の「まどろみ寸前」の脳波と似ており、太古の昔より地球上の生物は、この波長と調和して安定心を得て生きて来たと云われています。この事は、地球上の生物は人間の覚醒の心境と通じ合える事にもなります。故に、「地球の脳波」が母心の様に、地球上の生物に子守歌となって流れて安らぎに導く事は、法華經「分別功德品第 17」の中に「虚空の中に於いて、天鼓自ら鳴って妙聲深遠なり」の經文の如しであります。この様に、仏教と科学は大自然の生命世界の真実の真理を求めることを信仰としていることが共通して理解しやすく、地球市民が共有出来る「幸福の道標」の宗教と云えます。この共有出来る観点から、これからの幸福観を説明して行きます。

3 仏法から教示される幸福

「自分の心を幸福にするにはどうしたらよいか」と云う問いは、人類文明の命題です。この命題を、「苦悩原因の本因」と「真理の幸福観」を明らかに解決する為に深慮して答えているのが、仏陀の「実相」です。この「実相」とは、「宇宙を貫く真理が、その儘に映して来ている相」と謂う事で、一般の真理とは違います。一般に云う真理は「宇宙の実在」と云うだけに滞って、その「実在」が自分の心に如何

様に撮影されているかは考慮されていないのに比べて、仏陀の「実相」は「真理そのもの」と、それを完全に映し撮っている「自分の心」と二つ合わせている言葉です。故に「仏陀の如く正しく見た真理」の実相に基づいた表現方法と科学的説明を加味して「仏法から教示される幸福観」を説明致します。

3.1 苦悩を開顕した幸福観

人間は皆無と言ってもよい程、悩んだ事の無い人はいないでしょう。これは、幸福を誰もが求めている事と同じ様に人類の共有意識と言えます。この苦悩は、できれば避けたいのが、人間の心情でしょう。しかし、苦悩というのは逃げれば逃げる程追いかけて来ます。そして、どんな苦しみでも逃げたら、その事は一生問われ続けるのです。思い切って、苦悩の中に飛び込んでいけば、苦悩は温かい涙の手で抱きしめてくれます。故に、この苦悩について明確な理解をする事は、幸福になる為の大切な基礎になると云っても過言ではないと考えられます。そこで、「苦悩の理解」と「幸福の結び付き」を取り上げましょう。

(第1: 苦悩に感謝する幸福観)

人生の苦悩の原因は種々あります。本人の不心得のために起こる悩みや社会正義故の悩み、衣食住欠乏のための悩みもあれば、病気や危害を加えられる悩み、異性関係や仕事の悩み等々、悩みの様相は無数に分かれますが、あらゆる悩みに通じて一言で言えることは「苦悩とは、何処に非があるかを教えてくれる標識である」と云う事です。例えば、病気は、肉体の何処に非があるかを教えてくれる警告灯です。もし、苦痛が感じられなければ病気は進行して死に到るでしょう。又、人生のあらゆる苦悩も、人生上の病気を教えてくれるもので、それに依って始めて修正の行為に入ることが起き、人生の幸福を護る機能として真に感謝すべきことです。

病気の例として、ある24人の団体旅行者が料理店で蟹料理を食べた時、忽ちに腹痛を起こす者が現れ始め、残らず中毒症状に陥った時であります。にわかに吐いたりして反応が強かった者は速く回復して旅行を続け、吐きもならず下痢もならずといった者は重患にかかったと云う事ではありますが、外見からすると嘔吐した者が弱い体の持ち主の様に見えます。実際は全く反対なのです。

精神面も悪い事を感じられない人は、自身の因果応報の報いだけでなく、他人の幸福を損なわせる事にもなり、大きい責任を受ける事になります。悲しい哉、現代社会は社会的地位の高い人も含めて、その様な人が多く見られます。これは、家庭、社会の在り方に欠陥がある事を警告しております。

「悩むと云うも、病むと云うも有難き仏の手紙ぞよく読めぞかし」 (釈光輪作)

この様に幸福の実現は、苦悩を正しく理解する事が第一歩なのです。幸いに、警告灯の働きが、全ての人に備わっている事は、全ての人が幸福に導かれている証しであり、実現出来ると云う事です。故に、先ず苦悩に感謝して無心で苦悩の声に謙虚に耳を澄ませる事です。そこには、多くの幸福への気が付きが得られるでしょう。

(第2: 苦悩ある故に人生は素晴らしい芸術の場)

人生は皆、素晴らしい芸術であり、又、一人一人が芸術家として生まれて来ました。人生の美は、「上がり波」の幸福感と「下がり波」の苦悩感とが交互に起きるので美しく感じます。それは、生命の在り方と云うものが、本来苦と楽、苦悩と解放との交錯によって成立しているからです。

歌人 90歳の窪田空穂作

「古いぬれば 心のどこかに ありえんと 思いたりけり 誤りなりき」

と人間の悩みの一生を素直に表現した人生訓です。

しかし、人生に悩むと云う事は、人生の芸術家であるという証明です。それは、より良い人生美を創造し得る素質を持っていると云う事です。つまり、自分の心の中に「高い美」を持っているから「醜点」が鮮やかに見えるのです。芸術家は、カンパスに何度も筆先を触れて修正して「醜」をとらえようとして

います。「醜」を感じた時は一種の悩みですが、完成した時は無上の喜びを感じます。若し、人生が全て完全で何も美を創造する余地が無ければ、虚しい人生に成るでしょう。フィギュアスケーターの羽生結弦選手は「怪我をした事によってスケート人生を見つめ直せてオリンピック二連覇が出来た」と言っています。それから、作家の三浦綾子先生は次の様に述べております。「私は肺結核・脊椎カリエス・パーキンソン病などの難病の一生だったが、病魔と闘って乗り越えて作家活動をしてきた。本当にやる気を持つと2倍以上の力が出て来る。希望は失望におわることはない」と体験を語っています。

自然の生命の力は人間に対して美を創造する余地を用意しているのです。ですから、人生の悩みは、悩み自身が悪いのではなく、「自分に解決出来る自在性を忘れた時のみ厭うべき苦悩と成る」事を心得ることです。

故に、日蓮聖人は「苦をば苦と悟り、楽をば楽と聞き、苦楽共に手を合わせてお題目を唱えるべし」と御遺文に教示しております。全ての事には、それなりの意味が含まれており、人生を渋柿に例えると、「渋い柿程焼酎にさわすと甘くなる」と云われる様に幸福感が大きくなるのです。

（第3: 苦悩が真理を開く幸福観）

人生の苦悩は、現象に縛られて解決出来ないと思い込む心でもあります。

それを、雑阿含經に「縛りを以て生まれ、縛りを以て死す。是れを愚痴無聞の凡夫と名づく」と論しております。その縛りは、妄想より生じます。ですから、「一切の業障界は妄想より生ず」と(観普賢經)に説かれております。その妄想が、執着心と云う業障を作り、苦悩を生じます。そこで、「衆罪は霜露の如し、慧日よく消除す」と説いている様に、妄想に真理の光を照らせよと論しています。処が、人間は感情の強い生きもの故に、真理を受け入れるのに大変苦勞を致します。例えば、人間にとって一番の縛りは生命の「死」の問題です。それ故に、自分自身と親しい人の「死の宣告」は何ものにも替え難い苦悩と成り、理性を取り戻させるのに時間が掛かります。その事例を紹介致します。

「あなたと健康」社の月刊誌に掲載された、「中心」の主幹の常岡一郎先生の記事の中から「何が本当の親」のテーマの内容を紹介致します。

ある宗教の管長さんが90歳に成られた。高德の人として多くの人から仰ぎ見られていた。その一人娘に養子を迎えられた。幸せな家庭であったが、10年過ぎて子供が授からなかった。そんな中で、急に管長さんが亡くなられた。そして、若い御主人も急に逝かれた。一人娘は未亡人となって寂しい境遇になられた。涙の中に毎日、お墓参りだけされた。全く気の毒である。この人を少しでも慰めてあげたい。

どうすれば、生き甲斐のある人になって貰えるでしょうかと、彼女の女学校時代の親友から相談を受けた。それで、直接その方とお目に掛かって話しをした。

「あなたのお父さんがお亡くなりになったそうですね。」

「はい。」

「本当のお父さんですか？」

「はい。」

「お母さんも？」

「はい。母はもう亡くなりました。」

「あなたの本当のお父さん、お母さんも、この世にもう居られないのですね。」

「はい。」

「それなのに、あなたは居られますね。」

と言ったら不思議そうに私の顔を見られた。

「いいですか。あなたの本当の親、その親があなたの目も耳も、手も足も作って下さったのですよ。心臓も肺も作り幾十年も一秒も休まず、あなたを守り抜いておられる。それが、あなたの本当の親でしょう。あなたの肉体を生み出して下さった親は『親の縁』でしょう。その生みの親は亡くなられましたが、本当の親がこの世にお出でになる。その親の守りを貰っておられる。だからこそ、今もあなたは生きて

いられるのではありませんか。」

と言ったらニコリされた。

「その親に守られて生きている。この尊い自分の命をお考えにならねばなりません。また、その御親の心に沿う道をお考えにならねばならぬ時ではありませんか。生みの縁の親を慕って墓参りする。“本当の御親”のあることに気付かない。それは愚かな事になると思いませんか。若き日のあなたの産みの親のお父さんを考えてみませんか。産みの親のお父さんは凄い修行をなさって、本当の親がこの世の親である事に気付き出家なされた。だからこそ、万人に仰がれ管長になられたのです。その方の子として産まれたあなたは今こそ“本当の御親”のお喜びに成る生き方を研究し、お父さんの志しを継がれる事が大切な事なのです。」

そう話すと納得して下さったと云う内容です。

私達の肉体は産みの親から授かったものであるのですが、その背後に、この生命界に誕生と死の生命摂理の創り主の「本当の御親」がおられる。それを、遺伝子工学の村上和雄教授は「サムシンググレート」と仰いました。仏教は、この生死の業を仏法の「三法印」として具体的に説明し、それが、生命誕生から 36 億年の永き年数を経て来た現在の私達の生命体です。私達の命は、今生だけの生命の寿命ではありません。過去、現在、未来と繋がる生命を理解した時、真理に開かれた心が「死」と云う縛りを解放します。この尊い生命世界で、「本当の御親」は、自然界をバランス良く調和して生命を育み、万人万物の生命を創造しながら永劫に活動しているのです。「本当の御親」の生命を育む愛の働きを学んで受け止めた時、この世界は始めから、生と死、苦と楽の対立を超えた安らぎの中にある事に気付かされ、どの様に生きるべきかを教示されます。故に、死と真摯に向き合うことが大切です。この一如の真実の世界に目覚める生活をする所に、本源の命の「本当の親」の愛が深まり、一日一日と生命が生かされている有難さに合掌して暮らせる「無形の無上の幸福感」と成ります。その生き方を実証されたのが、過去に於いて代表する一人に釈尊があり、現代の代表する中からは、マザー・テレサ聖女も挙げられます。この二人の聖者の慈愛は人類の苦悩から幸福へ導く真理の灯明として永劫の救いと成るでしょう。その印として、その灯明は現在も万人の命の中に生き続けております。

「明らけく、後の仏の、み世までも、光り灯せよ、法の灯しび」 (伝教大師)

「苦悩から学ぶ幸福観」の結びとして、仏法から観ますと「煩惱即菩提」「生死即涅槃」「善悪不二」と言い表す事が出来ます。例えば「煩惱即菩提」について、病気を例に説明しますと、人間には生命を司る健康の働きの治癒力「仏性」があります。それをわがままに誤った生活をするると病気に成ります。その誤った生活が「煩惱」であり、それに依る病気が「健康の気付き」の「良薬」となって健康の心を生じさせ、「菩提心の切っ掛け」となります。故に「煩惱即菩提」と云えます。又、「善悪不二」についても説明すると、作家三浦綾子先生は「私は長い病気の間、この世に病気がなければいいと思った。自分の人生にこんなに病み続ける日がこよとはと、嘆いたこともあった。でも、今はその受けた試練は宝石のようなものだと感じています」と悪い条件から幸福の気づきを得ています。又、羽生結弦選手が平昌(ピョンチャン)オリンピックの優勝インタビューで語った「人間の弱さから強さが創られる」の体験も同じことと云えます。お釈迦様は、人生の迷いの「四苦八苦」から求道成されました。これは、人間を救う為には、先ず苦悩の痛味をとってあげる事が必要であると云う教示です。そのためには人間の苦悩の起因を理解して正してあげる必要があります。それによって苦悩は幸福の種を具えた「蓮華の根っ子の如く」苦悩の泥から悟りの養分を吸って、幸福の華を咲かせるものです。それは、人生の深い喜びを知ることになります。苦悩を克服した幸福は「磨かれた宝石」と言えます。そのためには、苦悩を無意味に嫌わず、苦悩に対して合掌し抱擁してあげることです。その方法として、お題目を唱えたり又は、瞑想をして平常心となって、囚われのない心で、苦悩にありの儘に相対し、苦悩が生じる起因の声に心を澄ませる事です。そこに、真実の相が浮かび、何をすべきかを気付かせてくれます。ですから、苦悩を人生の道標として向き合った時、幸福が光の影の如く付いてくるのです。それは、自分の欠点が解決して、不幸の妨げが消え、幸福の光が心の隅々まで明るく成るからであります。

3.2 諸行無常の幸福観

「諸行無常」とは、「一切の作られたものは皆、そのまま在ること無し」と云うことであります。それは、「この世界に現れたものは、何時かは必ず、その形を消す」と云うことと、「この世界に現れたものは、常に変わりて、ひとときも同じ形を留めていない」と云うことの二つの意味があります。

何の変轍もない真理の様ですが、この真理を本当に攫むと、人間は生まれ変わります。生まれた者は、例え長生きはしても必ず死なねばなりません。人間の死を厭う心^{いと}をどう解決つけるかの取り組みが、この法印なのです。

そこで、人間は実在なのか、現象なのか。若し、実在ならば「無くなる」と云うことはないのであり、「無くなる」と云うことは現象の映りものであると云う事に成ります。それを実在の様に思い込むのは、人間の五官の眼耳鼻舌身が外界の様子を取り込んで来たものを心が選り分ける。その心が偽物か本物か区別する程発達していないと云う事と、五官の機能能力が限られていると云うことです。

仏陀は「映る世界を在ると思うな。現れたり、無くなったりする世界を在ると思うな。本来、無いものは無いとせよ。その時に、死の悩みは跡形もなく消えるであろう。」「色に於いて染着^{せんじやく}し、纏綿^{てんめん}するを名づけて凡夫と云う」(雑阿含経)と説いており、「凡夫とは五官に触れたものを本当に在るものと思い込む生き物」だと諭しております。つまり、映る世界の現象は「業の働き」によるものだと云う事です。その業の働きは無限に展開されるのです。それが私達の生命の本質ですから、「生は死へ」「死は生へ」と形を変化させて展開し続けるのです。故に、私達の生命の存在は、36 億年に亘って変化し続けて来た生命であり、これから未来永劫に繋がってゆく生命なのです。

この教えは、死の不安を解消しますが、同時に、肉体ばかりでなく、財産、名誉、恋愛の得失の如き問題に就いても悩まされることが無く成るのです。人間の物に対する執着が無く成ると、心のわだかまりが消え、大いに安心の境地を見出す「**執着から解放の幸福観**」が得られます。この事を理解せず、物の執着を戒めても、煩惱は消し難いものです。物の実体を理解することによって、「執着を起こすにも起こせない」と云うことが大切なのです。

次に、「念々生滅」の「現れたものは、流れ流れてひとときも同じ姿を留めない」の真理ですが、「何故に流れ得るか」が問題です。

それは、映画の原理を例に上げると、スクリーンの姿が動く為には、後から後から新しい映像を絶えまなく代えて行きます。今の絵を映す為には前の絵を消さなければなりません。つまり、刹那々に現れた絵が完全に消えればこそ、映画は動き得るわけです。故に「無くなることが、動く原理」となります。これは、「物体の不可侵性」といって、同じ大きさのコップを同じ位置に同時に置く事は出来ないことを意味します。この道理が「変わる」原理と相俟って、位置が変わる。質が変わる。動く。生ずる。滅する。流れるなど、皆「変わる」原理によって変わっております。つまり「消える」原理によって変化しえる。地球も限りない速度で肉眼には見えないが、瞬々生滅の点滅をして変化しております。このことは、人間は物質の縛りから解放するのに役立ちます。それは、人間は自由を欲する本能があるのに物質界に幾重に囲まれて人間の自由が失われています。人間にとって「自由の感じ」が在るか無いかは、幸不幸に影響を及ぼす大事なことです。例えば、牢屋に入れられても、心に自由がある人は、「本が読める」「静かに考えられる」と思えます。病気で「死の宣告」を受けても、「今日の一日に感謝する心」が起きます。貧乏な人が奮い立って裕福に成るのも「自由の感じ」を回復する事によって得られるのです。この様に「念々生滅」の真理は人間に「**自由感の心境の幸福観**」を教示しております。

明治天皇の御製の

「あさみどり 澄みわたりたる 大空の 広きを己^{おの}のが 心^{こころ}ともがな」

の心境の幸福観です。

それから、現象界は「点滅」している事が解ると、創造の原理が確立致します。現に、物事が創造出来るのは、現象界が不断に「点滅」しているからです。前に述べた映画の像の様に、点滅の前の絵がスッカリ消えた所に前の絵に手を加えた絵を挟めるとそれが映し出されると云う、絵と絵の空白こそは「動の原理」であり、「創造の原理」であります。例えば、紙が風化作用で朽ちて行くのも、紙の一駒一駒の間に空気の持つ働きが割り込んだからです。この際に、他の働きで中断されつつあるのに何故、一変に変化せず、徐々に変化するかと云うのは、一駒一駒の間の空白は全くの空白ではなく、「今の紙」が「次の紙」を引っ張り出す、見えない力の「引業」が働いているからです。故に、紙が紙として在り得るのです。また、業は「力」の働きをなして眼には見えないが、空間にある現象を起こす原動力と成ります。例えば、飛行機が高層圏を翔ぶと、その機関の熱が尾を曳いた具合に、軌跡に残ります。それが、上層圏の冷たい空気に触れて、雲を残し、一本の雲の線が何時までも上空に描かれているのを見ます。機関の熱は目には見えませんが、白い雲を起こす力と成るのです。故に「物体は業の軌跡(あと)である」と云うことに成ります。「念々生滅」の真理は、一切の現象を眼には見る事の出来ない業の一元に還元する「業感」の縁起です。故に、一切は業の展開であります。実在ではない。だから働きさえ起こせば、どんな現象でも影響を享けないわけには行かないことに成ります。これを「現象の可塑性」と云います。「可塑性」は、彫刻家が軟らかい粘土の塊を、自分の心に描いた美しい姿の通りに、塑(かたちづく)って行く、自由に、土の塊を美しい姿に変えて行く。与えられたものが、どんな形をしようとして、必ず自分の思う通りに塑って行くことが出来ることです。この可塑性が成立する事によって、人間の創造意志が充分に発揮されて、何事もやれば出来ると云う「自由自在の創造感」が得られます。

「為せば成る、為さねばならぬ、何事も、為さぬは人の為さぬなりけり」

と云う、米沢藩大名の上杉鷹山(ようざん)公の訓がすっきりと消化されるのです。

この事から、「念々生滅」の仏法は、人間の生命に享有されている「無限の創造の幸福感」を生じさせます。因みに、平昌(ピョンチャン)オリンピックのスピードスケート女子 500m 競技でオリンピック新記録を出した小平奈緒選手は、「与えられたものは有限。自分から求めるものは無限。」と自覚して挑戦して来たと仰っています。

3.3 諸法無我の幸福観

この真理に入る前に、「諸行無常」の「諸行」と「諸法無我」の「諸法」の違いを説明しますと、「諸行」の「行」は一切の現象界にある「創られたもの」です。

「諸法」の「法」は一切の現象界にある「創り出すこと」(働き掛けるもの)です。

そこで、「諸法無我」の真理を説明すると、一つ目は「一切の現れた心の判断は、自由意志でなく、環境条件によって作用する」の立場の見方です。

二つ目は「一切の心の作用の影響は、縁起の関係によって形通りに且つ際限なく展開する」の立場の見方です。

始めに、(一つ目)の「自由意志でなく、環境条件によって作用する」の説明を致します。

そこで、「無我」の「我」とは何であるかを考えてみると、「我」ほど、身近なものはないので無雑作に使われていますが、改めてどれが「あなた」ですかと、問われると判っている様で判っていないものです。「これが私です」と言って「体を指さす」、「それでは、死んで野にさらされて白骨になったら、それがあなたですか」「白骨は自然から授かったもので、私ではありません。多分、私の靈魂だと思います」「あなたは靈魂が永遠に在ることが判るのですか」「いえ、判りません」と云う様に「我」、「我」と何遍も言っていますが、何が「我」か相昧に成ります。それは、「私がした。私がしない。」とか、「私にはそれをやり遂げる自由な力が在る」と云う「自由意志」の在るところが「我」であります。故に、普通の物体には、自分で自由に働く力がないと思われるので「我」があるとは云いませぬ。自動車に「自由意志」があるとは謂わない様にです。しかし、人間は起きてから寝るまで色々な活動をしておりますので「自由意志」があると感じて「我」の意識を強く持っているのです。ところが、今まで在ると思い込んでいた「我」は、本来無いのです。誰でも、「我」は在りたいと云う希望が、心に意識されておりますので、「我がない」と云う事は理解し難いのです。特に、西洋思想の人には受け入れ難いのです。しかし、科学的に分析すると、本当に「我」である「自由意志」は無いのです。人間は、自由意志なしで生まれ、生活環境の中で育まれ、そしてやがて老い、死んで行きます。あなたの行動も、一つひとつが、皆、必然の環境条件があって、そうしているのです。例えば、「私が芸術学校を選んだ」と言っても、それは、芸術の道を選ぶ理由が先に在ったのです。仮りに「芸術が好きだから」との言い分も、その「好きだからという気分」を誰が作ったかと云えば「環境条件」なのです。「私は自由に休んでいます」と言っても、「休みたい気分」がなければ休みません。その「休みたいと云う気分」は何処から来たかという、肉体の働きからきたのです。自分が自由に脳を動かしたのではありません。仮に、無理に休んだと言っても、その「故意に無理をする気分」は、その時の環境の条件がそうさせたのです。「但、環境がそうさせている。自由意志では無い」のです。人間は「純白の心で産まれた赤ん坊がこんな環境で作られた性格で、こんな環境に置かれたら、当然こうなるのだなあ」という因果関係で行動しているのです。ですから、人間が罪を犯すのも、又、聖人に成るのも、その人の教育環境、経済環境、家庭や社会の環境を仔細に描写しなければ成りませぬ。それ故に、「罪を憎んで、人を憎まず」と訓じているのです。そして、維摩経の「善悪不二、邪正一如」は、人間世界に於いて、人間の都合上で何が善いか悪いかが変わると論じております。戦争の時は人殺しをするほど勲章を与えられ、平時の時は刑務所に入れられます。この様に善悪は環境条件によって左右され、人間は動かされます。こんな具合に、一つひとつ洞察すると、何処にも「我」という「自由意志」を得るものを見つけ出すことは出来なくなります。それが解ると、人間の増上慢が降りて、謙虚な人間に成らざる得なくなります。この様に縁起の法が「無我」を悟らせたのです。この無我の法に基づくと、どんな人も元より悪人は無くなります。そして、釈尊も多くの聖人も、少しも偉いわけではなく成ります。但、環境条件が偉くしたのです。但し、人類にとって「有り難い」方で恩人なのです。それは、偉い偉くないとかではなく「尊い」方なのです。この真理を理解すると「人間平等の真理」が確立致します。世間の「人間平等」は人間の都合で変わります。人類の歴史上で差別の悲劇は如何ばかりだったでしょうか。それは、平等の根柢が相昧だったからです。この事から、「諸法無我」の真理は、**「万人平等愛の幸福観」**を教示致します。

次は、(二つ目の)「縁起が創る自己祝福」についてです。「諸法無我」は、先ず「実の如く、自らの心を知る」(大日経)ことを見詰めた時、全く自由の無いことが判ります。然し、それでは人間は満足出来ません。人間の生命は自由に成りたいのです。その為には、「無我」の原理を踏まえた努力が必要です。それは、「無我」の「条件の原理」を逆に活用した時、その努力に比例した「自由の心」が「仏法の力」から授かります。それは、真理ですから、誤魔化しが無く、尽きることもありません。先に説明した様に、「環境条件」を善くすれば誰でも善く成れるのです。その「無我の真理」の「自由の力」を我が身に実感出来た時、「私は生まれて幸福だった」と「自己祝福」する気持ちに成れます。そして、その「自己祝福」で自分を愛せる様に成った分に比例して、他人をも同様に祝福出来るのです。ここに、**第二の愛の「無我の法」から教示される「自己祝福の幸福観」**が教示されます。

(三つ目の法)は、「無我は人を許す」という事です。今まで「無我」の法を説明して来た中に「人の心は、環境条件によって作られる」と述べました。この事を理解したときに、私達は加害者に対しても「気の毒な人だなあ」と憎しみよりも「同情の念」が起きます。自分も又、同じ境遇になれば、そうならざるを得ないのです。「否、自分は違うんだ」と言う人も、よくよく、洞察すれば、自分がミスをした時の事

を振り返ると、そこには環境条件があったことに気付きます。人間は皆、「善く成りたい」のです。不幸に成りたい人はいないのです。その良い例は、国が戦争になれば、国民の心は忽ちに生活環境の変化と共に変わるのです。それから、「人を憎むことは、自分を害する」と云うことを自覚せねばなりません。「憎しみを解決することは、自分を解放する」ことなのです。この実例を取り上げます。

ベトナム戦争解決で、ノーベル平和賞にノミネートされた、「ティック・ナット・ハーン」というベトナム僧の老師が、南フランスの「プラム村」で「心の平和研究所」の指導をしています。この研究所での修行体験のお話です。彼の文章を記載いたします。

この「心の平和研究所」は、知識を学ぶことではなく、「心の平和を修行すること」なのです。私達は、どうすれば肉体的、精神的、心理的に平和になり得るでしょうか。私達は、パレスチナの人とイスラエルの人をプラム村に招待し、一緒に修行することを時々していました。初め、彼等は苦悩、増悪、怒りの為に、お互いに目を合わせようとしませんでした。彼等は互いに緊張した面持ちで、そして懐疑と疑心に満ちていました。一週間目に、私達は、彼等に呼吸の瞑想と歩く瞑想、そして食事でも心を集中して食することを学ばせました。その食事の瞑想を通して、彼等は命の偉大さを悟りました。私達は、彼等の心の中にある愛と感謝の種に水を与えるのです。その後も引き続き、私達はパレスチナの人とイスラエルの人に、思いやりの気持ちにあふれた敬聴と、愛情のこもった話法を修行させました。パレスチナの人は、自分達の悩みについて語りました。私達は彼等に、胸のわだかまりを全て吐き出せるように勇気を与えました。しかし、他人に責任を転嫁することも、辛辣な意見を言うことも、非難や、判断することもいけないと指導しました。そうすれば、相手方が思いやりの心で、又、オープン・マインドで聞くことが出来るのです。そして、私達は静かに座っていました。例え、相手側が自らの判断基準で話したとしても、間違った視点で話したとしても、私達は常に思いやりの心で敬聴する修業をしなければなりません。この様な修行を通して起こった変化に、私達は明確に気付くことが出来ました。彼等は、自分達だけが苦難に遭遇しているのではなく、相手方も同じ苦難を味わっているのだという事を悟ったのです。パレスチナの子供達も、イスラエルの子供達も同様に全く同じ苦難を経験しています。彼等は初めて、互いを人間として認識し始めたのです。この様に彼等は相手を、完全に新しい目で見ることが出来ました。憎悪と恐怖の目ではなく、思いやりの目でもってです。私達は相手に対し、間違った認識を持っていることを知っています。相手方も同じです。しかし、修行を通して更生することが出来ます。イラク戦争も間違った認識により勃発しました。それが、殺し合いを引き起こします。この様な間違った認識は、武器で無くせるものではありません。それは、愛のこもった言葉を発し、思いやりの心で敬聴する時、無くすことが出来るのです。残念なことに、多くの政治家達は、心を修行する機会がありません。ですから、私達には「心の平和研究所」が必要なのです。

この体験が教示する様に、人間の心は「環境の条件」によって作られることがよく理解出来ると共に、又、それは「環境条件」を善く作ってやれば、誰もが平和な心を取り戻せると云う事例であります。そう理解されると、全ての人から憎しみが消えて人間社会に明るい希望が湧いて来ます。

この事例は、無我の法の理解の上に人を許し合ったとき、一家が、一国が、全世界が円満に和解し、又、経済の状態や、病気の状態が好転するのも、心の縛りが解けて軽くなり、縁起の働きが自在に流れ出すからです。この事から、「無我」の法は人類に「慈悲の悟りによる同情の許し合う幸福観」を教示しております。

（四つ目）の無我の法は「人は自分である」と云うことです。この事について説明を致します。「無我の法」は「一切の創り出す作用は縁起の關係に限界無し」という、「現れた環境は、何処までも關係が展開して結びついて行く」と云うことです。それが「縁起の法」の真相です。これを、華嚴經で「無尽縁起」と云います。「無尽縁起」の法則によって、自分の行為は思うこと、話すこと、行うこと、何でも「業」として必ず残って關係して行きます。それは、人間世界だけでなく、物質にも、動植物にも、「業の働き」

として影響を与えている様にです。自他が一蓮托生関係なのです。故に、他人と自分とは、いつでも置き換えられるものなのです。故に、「業の働き」は人間を不滅にします。その意味で、聖者とは人類の為に尽くした行為が、死んでも人々の心に生き返った人であり、それが、「真に生きた人」と云えます。凡そ、生甲斐として最高のことでしょう。その聖者の心は、「他人は自分であり、自分は他人である」と云う、「自と他の区別を超越した」愛の心です。それを「同体の大慈悲心」と言っております。

その「同体の大慈悲心」とは、

「あの人はあんなに嬉しがっている。がしかし、あの人は、実はこの私である。この私が嬉しいのである。」と云う心境です。

それは、涅槃經の「如来は、一切衆生を見ること、猶、一子の如し」と言う愛の表現の如く、釈尊は「羅睺羅(らごら)」という一人息子がおり、その一人息子に対する愛情を一切生きとし生けるものに向けられた、切ない親心であります。それを「極愛一子地(ごくあいいちじ)」と云えます。この様に「無我の愛」は、「人は自分である」と云う**「自他一体の愛の幸福観」**を教示しております。因みに、世界の幸福度ベスト 3 の国の共通することには、「国民が人間関係を大変大切にしている」のです。それから、

日本の E テレビの健康長寿法番組の紹介で 1～2 番に挙げていたことは、「困った時に相談出来る人がいる」「社会で広い人間関係を持つこと」と云う事で、食物、検診、運動よりも上位になっているのです。これは、「人は一人では幸福に成れない」ことの現われで、人間の生命の本性でありましょう。

3.4 涅槃寂靜と諸法実相の法の幸福観

人間の本能は「苦からの超越(克服)」と「楽を求める創造」を満足させることに依って幸福感を受けます。この生命本能を実現させるのが「涅槃寂靜」の真理です。

その、「涅槃」とは、目に映る現象をそのまま「永遠に在るもの」と思ったり、自分には何でも「自由に出来る意志が在る」と思ったりして、本来無いものを「在る」と思い違いをしている、その「思い違い」を「吹き消し」たのが涅槃であり、それが「現象世界の苦を超越した」世界のことです。「寂靜」は、一切の現象の有常・有私の思い違いの執着から悟られた時、生命の実像が開顕されて、一切が縁起の真理により、環境条件に基づいて自由自在に創造され、且つ、その条件の原理は全てに平等に働き、素晴らしい創造の世界が創られる事を云います。これが、「楽(幸福)を求める創造本能」となり、「寂靜」の「現象世界の創造」と成ります。

これは、「無常、無我」の二法を合わせた一体の真理を現しています。この二法によって、物質と心の「苦悩から覚醒」し、今度は二法によって「幸福を創造」するのです。それが、涅槃の「消滅」と寂靜の「生起」であります。この世界観は言葉では言い表せません。仏陀はこの「涅槃寂靜」を悟った覚者なのです。この真理を如何にしてか、衆生に悟らせて「我れ仏」を成就させることが仏陀の慈悲心の誓願です。

釈尊入滅後の仏教の歴史は、「涅槃寂靜」を大衆社会の変化に合わせて大衆救済の為に、「我れ仏」から「皆な仏」に進展されました。それが、大乘經と云われるものですが、その中で「法華經」は慈愛の完成版として「愛の究極」に到りました。その真理は「諸法実相」と云い、人間だけでなく、一切の生命にも仏性を観る「皆な仏」の生命愛です。そして、それが実現された、一切の生命、社会、自然国土の「仏の浄土」を「一念三千の世界観」と云います。幸福観もここに到った時、「究極の幸福」と云えるでしょう。現在に至っては物理学でも証明されています。自分の周囲にある森羅万象のあらゆるものの実体の究極が存在としか言いようのない物で出来ていて、それが縁起によって個々の現象を演じているのです。そこに「一念三千の世界観」が展開されます。それでは、具体的に幸福観を説明致します。

(一切を仏と観る幸福観)

その1のDPに掲載した「幸福に結び付く心の働き」で、「唯心」について説明したことと重なりますが、「一切の現象は、心に支配され、心を主とし、心より成る。人もし淨き心をもって或いは語り、或いは行わば、楽しみの彼に随うこと、影の形に随いて離れざるが如し」(法句經二)。この經の云わんとすることは、一切の現象は「心の影」だと云うことです。それは、心に「我れ仏」と思い、それが「言葉」と「行為」に現われていると、その人は「仏」のように成って行くのです。ところが、人間がこの現象世界に住んでいると嫌なことを見聞させねばなりません。「嫌な人」という感情を持ちたくないと思っても、入道雲の様に湧き上がってきます。すると「嫌な人」と思われた方も、その心の念を受けて「嫌な人」の様相に成って行きます。そして、自分もその「嫌な人」の様に成っていくのです。何故ならば、その「嫌な人」の思いは自分の心の中に在るので、「一切は心の影」の如く、自分の人相も嫌な相に変わるのです。せっかく、「我れ仏」が判っても、現象世界の嫌な所を見ていると、「我れ仏」が汚染されて、影が薄くなるのです。この問題を解決するにはどうしたら良いのか。そこに、「仏性の平等愛」による「皆な仏」が生きて来るのです。現象の様相は、例え醜くても、涅槃の「全ては映り物」であり、本来の心は罪無しであり、「環境の良い条件を与えれば美しくなる仏である」と仏性が現われることを祈って行くことです。因みに、一切の人間を「皆な仏」と観ることによって「我れ仏」が護られ、且つ、多くの人達を助ける力と成ります。

この様に「現象の世界をありの儘に眺め^{なが}乍ら、その事実の中に個々の美しい仏性を見る」ことを「諸法実相」と言います。ですから、家庭、知人、職場、住民に「嫌な人」と思わざるを得ない人が居ても、その時にその人への囚われを無くして事実の姿に相對して、本来の美しい仏性を拝むことです。その様な美しい眼差しに見られた相手は、暗い心に光が射し込まれて、今までの心に変化が起こります。仮に頑^{かたく}な心でも、「無我の環境条件」の原理と時間的「因果の法」で変わって行きます。それは、人間には「善く成りたい」という本能が在るからです。

その例として、私が師匠から聞いた実話を紹介致します。

「私が近くしていた娘が、姑のいる家へ嫁にいました。その姑は名だたる『やかまし家』で、気の毒なのは嫁であると、知る人は皆その様に思い、いつ追い出されるか時間の問題であると見ておりました。ところが一年たち、二年たっても追い出されそうに有りません。これは不思議と訪ねてみると、二人は本当の母娘より親しい仕草をしています。娘の、姑の欠点を全然眼中に入れない性格が、姑の凍りついた心を溶かし、内心孤独感を懷いて困っていたのを救助した形になりました。『嫁のお陰で私は助かりました』とは、姑から何度も聞かされた言葉です。『生まれ変わるというのはあのことだろうな』と以前の姑を知っている人は語りました。人相が『鬼から仏に成った』と言っても誇張ではなかった。そして、私が感心したのは、その娘に『努力しています』といった形跡が少しも無いことです。きわめて自然に『諸法実相』を行じているのです。」と云うお話でした。この様に「皆な仏」と観ていけること程、楽しいことはありません。人間は、本能として、楽しく、温かく、美しいものを創作する所に幸福感を覚えるのです。

「我、汝等を深く敬う、敢えて輕しめず。故は如何。汝等、皆、菩薩の道を行じて、當に作仏することを得せしめんと」 (法華經常不輕菩薩品第20)

それから、「諸法実相」は人間だけでなく、一切の事物に対しても実行することが肝腎です。それは、愛を感じるのには人間や動物だけではないのです。一切のものは、人の心を受信し保存しているのです。そして、保存するだけでなく、ラジウム鉱のように周囲に放射しています。

例えば、一流の芸術家は使う道具を神さまの様に大切に扱います。演奏家は楽器を安全な所に安置して誰にも触れさせないそうです。もし留守中に誰かが触れると「さわったな」と必ず言い当てると聞いています。それから、洋裁の上手な人に、新しいミシンを一度使用して頂いてから、そのミシンで裁縫すると上手に仕上がると云われています。又、サンフランシス

コノ近くに住む有名な植物改良家は、記者の質問で「あなたはどのようにして立派な新種を創り出すことが出来るのですか」の問いに、「植物を可愛いがるからでしょう」と答えたと、私は師匠から聞きました。この様に、庭石でも、花でも、茶碗でも、楽器でも、この世に生まれた限りは、それなりの魂を持ち、人間の心に答えて生活しているのです。それを理解出来た時、私達の生活は今までの何倍も幸福感に包まれるでしょう。

このことが、「涅槃寂靜」を開顕した「諸法実相」の辿り着く「一念三千の世界観」の教示する「一切を仏と見る幸福観」です。

更に説明を付け加えると、「一切を愛する」ことは、「一切に愛される」ことに繋がり「人と人」「人と万物」が自他共に愛の恩寵に包まれて知恩報恩の生活と成ります。この様な幸福観は「簡素生活」でも幸福に満たされます。そして持続可能性・環境問題、享樂的欲望などの経済問題も「経営モラル」が改善されて、人と万物と自然を尊重する「敬天愛人の共生の経済」と成るでしょう。

「命すべて、元つみ親の、分け身なり、華の御姿、讀めしめ給へ」（飯島貫実道師）

（享受された生命の幸福観）

諸法実相の愛は、「愛すること」と「愛されること」が同じ様に揃ったとき「完成された愛」と教示しております。しかし、「親子の愛」は、親の子に対する愛と、子の親に対する愛の深さを比較した時、親が子を思う愛が勝っていることを実感させられます。それは、人間のみならず、動物の世界にも通じます。

子を思う親心の歌に、万葉集の歌人「山上憶良」は、

「銀も 金も 玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも」

と詠んでいます。又、幕末の学者吉田松陰は

「親思う 心に勝る 親心 今日のおとづれ 何と聞くらん」

と、処刑の前夜に「子を思う親心」を痛んで、詠っております。

しかし乍ら、現在の日本社会は親による子供の虐待が増え、誠に悲しいことであります。

生命軽視の風潮を社会全体で真剣に取り組む必要があります。

そこで、改めて私達の生命の存在について深慮した時、私達の生命は尊厳なる宇宙生命界に「享受された生命」であり、それが、天地の至れり尽くせりの恩恵を受けて生かされていることに、生命の本源の親の愛の深さを気付かされます。しかも、人智の及ばざるものです。

例えば、熟睡する。何もかも忘れて眠っている。それでも、自分は本源の命の親に守られている。だから、心臓の働きも呼吸も調節されている。それから、会話する時に声を出す、物を動かすのに力を出す。しかし、私は一度も声も力も体内に入れたことがない。それに毎日何度も話したり、力を出したりするのに、それでもちっとも減らない。この様な有難い体の構造、機能を授かっています。しかも、人間の勝手な都合で不節制をすれば病気になり、反省して節制した生活に戻せば健康を回復する様に、人間の活動、生き方も本源の命の親は導いて下さっています。心の健康も同様です。この様に、生命の摂理は「生命を生み、育む」能力を、生命の本源の親はその子たる万物の生命に享受しているのです。

その事例を紹介します。

有機農法で野菜を栽培していた方が、金網で飼育されて卵を産まなくなった廃鶏になる鶏を可哀想になり貰って来て育てました。ところが、土の上に置いても歩く事も知らないから、じっと座りこんで動かない。早く健康になって欲しいと、大根菜と玄米と糖を混ぜた餌をあげても、食べないでじっとして土の上に腹ばいになって動かない。2日ばかり、水だけやって様子を見ていたら、徐々に自然力が蘇り、土の香りを思い出した様に草をついばみ出した。それから、ヨチヨチ心細そうに歩き出した。そして、虫や生えている草をついばんで食べられる様になり、元気に歩き走り廻る様になった。驚いた事に、今まで土の上を歩いた事がない鶏が、砂地の上にしゃがみ込み、砂療法を始めた。そして、盛ん

に羽をばたつかせて体に砂を掛け、砂浴びを始めました。その後、5・6 日したら、卵が土の上に転がっていた。生まれた時から土を知らず、金網の中で暮らして来た鶏でも、自然の環境に温かく包むと命を躍動させ蘇らせてくれる、大いなる生命の親の愛の力を授かっている。同じく人間も自然の生命力を享受されている。故に、自然の食べ物に反して毎日ファーストフードを立ち喰いし、コーラーをガブ飲みし、その為、背ばかり高くても骨も体も弱く、ひどい気管支炎で苦しんだ若者が、大地が育てた自然の食べ物を食べ、自然に生きる心に蘇えると、すっかり元気になってゆく。心も体も生命の本源の親は摂理に基づいて、温かく大きく包んでくれている。

この様に、大いなる生命の力を享受された自分自身に感謝と喜びの気付きを自覚した生き方が出来るかによって「生きている事の価値観」が変わってきます。

この事に関連して、財団法人横浜船員保険病院副院長の長堀 優^{ゆたか} 先生が「病気が治る治らないかではなく、その経験を通して心を成長させ愛を学んでいくこと」を訴え、事例を述べています。骨肉腫の為、13 歳で逝ってしまった猿渡瞳さんが病魔と闘う中で綴った詩についてです。「みなさん、みなさんは本当の幸せって何だと思いますか。実は幸せが、私たちの一番身近にあることを病気になったお陰で知ることが出来ました。それは、地位でも、名誉でも、お金でもなく、『今、生きている』ということなのです。」

この様に、「今、生きていること」に感謝すると云う心境に、13 歳の瞳さんが達していることに驚きを禁じ得ないと述べており、更に、「ママが癌じゃなく、私が癌で本当に良かった」と病気が判明した時に、彼女はこんな言葉を口にしているのです。13 歳の少女が、こんな心を震わせるような一言を口に出来るものなののでしょうか。苦しい中でも、家族への深い愛を忘れない幼い彼女の気高い姿とその驚嘆すべき精神力は、同じ様な年頃の娘を持つ私は感動を超え、衝撃的でしたと述べています。

「死を間近にした心理」は人生感を大きく変える力があります。それは、一日一日の命と自分以外の身の周りの人や生きもの、自然に対しても見方が慈愛感を持つ様に成ります。今までの人生の価値観が一転します。人間は色々なことを考え、求めます。それは生きていればこそその話しです。この大事な生命を、大いなる生命世界の摂理は、親心のように私達の生命を育み、守って下さっていることに、合掌をせざるを得ません。そして、その恩に報いる生き方をせねば成りません。それは、日々の生活のあり方にあります。

私のヨーガの生徒の親御さんのお話です。

「もう 10 年以上も前の事ですが、幼稚園の息子と一緒にトマトを育てました。毎日、息子は楽しみに、実が成った、大きく成ったと青いトマトを可愛いがって撫でておりました。そのトマトが大きく育って赤くなり、丸々と美味しそうに成りました。ところが、楽しみにしたトマトは、朝起きてみると、カラスが突っついて地べたに落ちていました。息子が可哀想になって、私は『カラスは憎らしいね』と言いました。すると息子は『お母さん、そんな事を言ったらカラスが可哀想だよ。カラスだって生活があるんだよ』と言いました。私は幼稚園の息子が『生活がある』なんて教えた事もないからビックリでした。」

との話しですが、「三つ子の魂、百までも」「食べ物を粗末にしたり、悪いことをしたりしてはいけない、お天道さまは見ていますよ」と昔から親たちは代々伝え続け、日々その生活の中で実践努力して培ってきた。それをお天道さまが、息子に教えて下さったのです。ここに「命の大切さ」と「命を育む努力」と「恵みを分かち合う」慈愛の教示が込められています。まさに「享受された幸福観」は日々の身近な生活の生き方の中に育まれるのです。これは万人が共有する幸福観です。この幼な児の様に「享受された生命愛」が浄化して輝かす生き方を、私達は見直す事が大切です。その時に、仏典の「此の土は浄土なり、衆生は皆な我が子なり」の「享受されている恩愛」を実感されるでしょう。そこに現在の生活の中で多くの幸福の気付きを得られるのです。今年も、雪融けの寒空の中で「露の臺^{つみ}」が風に揺られて、逞しく花を咲かせます。誰も教えなくても、お天道さまは時と共に咲かせて下さります。

この大事を経営者が幸福観として受け入れた時、利益第一主義の経営信条が、社内外にお陰様の感謝をモットーとする「敬天愛人」の経営に変わり、人間性も商品も取引きも、質の内容が豊かに成る

でしょう。曾ての尊敬された経営者にはこの精神がありました。「作る人、売る人、使う人」三方好しの土台と成る心構えです。この様に「皆の命を輝かす経済社会」が経営者の心の自覚によって実現されます。

「^{あめつち}天地を ^{うみのり}生み成したもう ^{ごう}御法かみ ^{たふ}妙の言霊 ^{ことだま}鳴り満ち給へ」 (飯島貫実尊者)

3.5 結び

この章では、「仏法と人間医学から教示される幸福観」は、現在の課題の多い人間社会や自然環境に、地球市民が如何に解決して幸福を実現して行くかの道標に成ればと願い、同じ地球市民の一員として、地球上の全ての生あるものへの思いを込めて、仏陀の慈愛の幸福観を述べてきました。

それを纏めると

一つは「苦悩を開頭した幸福観」

二つは「諸行無常法の現象の常に変わりゆく自由自在の創造の幸福観」

三つは「諸法無我法の心の環境条件の原理に基づく縁起の創造観と自他一如の仏性平等愛の幸福観」

四つは「涅槃寂静と諸法実相の人・万物の「皆な仏」と「享受された生命」への感謝の幸福観」

と成ります。

幸福観については、多くの書籍等で、持論が述べられていますが、人間の生命の根源となる宇宙生命の真理と人間医学上から教示される幸福観は、地球市民が共有出来る条件となり、その共有する幸福観は、幸福社会像を協調して創造するための指針となります。この事は、個人と社会の課題を蘇生させる原動力とも言えます。そもそも、人間文明の発展は、真理を発見し、真理を応用して築かれたものであります。但、欠如したのは、発展の目的が真理に添っていなかったことです。残念なことに、今日も科学技術の進歩が、人間の頭脳を増上慢にさせ、人間社会、生命、自然などを科学技術でコントロールしようとしているように見られます。人間は幾ら進歩しても、真理だけは創れないのです。寧ろ、大きい視点で生命の世界観を見た時、人間や万物は「宇宙生命界の摂理のシナリオの中で演じている」と考えられます。この事実を洞察して理解した時、現在の人間社会の在り方に猛省を促し、迷える心を導かなければ成りません。その意味から、現在の経済至上主義の享楽観の幸福とは違う、「仏法と人間医学から教示される幸福観」は、親心のように全ての人達をどんな環境の中からでも幸福を得られるように、「真理の智慧と慈愛」で導いております。故に、真摯になれば誰でも人生に光明を得られます。

その事例を紹介します。

これは、東城百合子主幹の月刊誌「あなたと健康」に掲載されたものです。

24歳で亡くなられた嘉郎さんは、産まれた時から心臓に異常があり、とても5歳まで生きられないと医師に云われておりました。しかし、母親は自然療法と自然の食べ物を渾身的に続けました。その甲斐があって、手術も出来ないと云われた子供が8歳の時、手術を受けました。しかし、眠ったまま眼が覚めなかった。医師には「脳死状態で命は取り留めても生きているだけ。大きな障害はやむを得ない」と云われました。でも、お母さんは諦めませんでした。「医学で駄目なら、私に出来る母の思いをさせて下さい」と涙を流してお願い致しました。医者も人の子、この母の思いに涙ぐみ「何でもしてあげて下さい」と云って下さりました。母は病院の特別室で玄米スープや自然食の裏ごしにしたスープと薬草の煎じ汁を当てがいました。そして、「これは頭に良いからね。体に良いからね。大丈夫だよ」と子供の体に手を置いて「母の思いよ、天に通じよ」と祈りました。医学は駄目と云っても、以前に8年間の努力の積み重ねで、人間の力以上の無限の力のある事を知っていました。そこに、「命を信じる愛があった」

のです。「心は宇宙生命に繋がるエネルギー」です。何日かした或る日「お茶」と言って眼が覚め、立ち上がりました。だが、片方の足は動きませんでした。医師は「これだけでも奇蹟だ。それ以上は無理だ」と云われました。それでも、母と子は、素直にその弱さを受け入れて、他人と比較する事なく、今、自分が出来ることをコツコツとやり遂げて、ついに両足が動く様に成り、学校に通えるように成りました。それから感謝と努力を続けて、嘉郎さんは、24歳4ヶ月の人生を終えて旅立ちました。しかし、短い人生を出来ることは地味に積み重ね、周囲には温かい風を流す安らぎの人で、精一杯生き抜いて来た人生でした。亡くなられた時、母親は涙を流しませんでした。それでも、医師に「よく頑張ったね。立派な最期だったよ」と言われた時は、涙が止まらなく成りました。

「生まれると云う事は、この世に夫々^{それぞれ}の使命をもって生きるのだよ」と、生命の誕生は教示されています。嘉郎さんは、障害をもった心臓を頂いて産まれました。他の人になく重荷の旅路でした。しかし、弱さも足りなさも素直に抱いて、厳しさの中で多くの安らぎを残されました。この事は、どれだけ多くの人達を勇気づけられたのでしょうか。マイナスをプラスに変えて、周りを浄化し、賜った生命を精一杯生き、安らかに召されました。命は天命で産まれ、天命で還る。長く生きるだけが能ではない。どう生きたか。魂に何を宿したか。その内側が命となって繋がる。この生き方は「仏法と人間医学から教示される幸福観」に基づく幸福像が現わされております。

地球市民には、様々な悩みの境遇の方がおられますが、この体験談の中の多くの教示が何かしらの幸福の灯明と成るでしょう。それが、嘉郎さん母子の願いであります。そして、それは仏法の幸福観で説く、「生命世界に流れている親心の愛」の代弁でもあります。私達には、幸福に成れる条件を色々な形で授かっています。そして幸せが、今、この瞬間にもあると云うことも理解することです。そのためには、私達は「気付きと培う」心を持たねば成りません。それが幸福を得る「目覚めた心」なのです。「ステップ・バイ・ステップ」で一步ずつ、真理の「智慧と慈愛」の二本足で、苦楽の人生の波を皆んなで幸福への道に培って進んで行くことです。その時に私達の幸福を育む心が、生命世界に流れている親心の愛のエネルギーと結ばれるのです。

「我が命 おほみ旭の御霊なり 光陰なく 照らしめ給え」 (飯島貫実尊者作)

4 仏教思想の個人と社会の幸福観の理念

4.1 個人の幸福観

その1のDPで、仏教思想の「仏法と心の働きによる幸福観」と3章で「仏法と人間医学が教示される幸福観」を説明しましたが、仏教思想の目的は、概略すると、「生命界の実体」を明らかにして、「全ての生命を敬い」そして「本来の生命の美を顕わす」ことです。「本来の生命の美」は、人間に即して表現すると、「心と体」(自己)と「自己と他の命との縁(ふ)れ合い」の行為から成り立っています。それにもとづいて「個人の幸福観」を一言で述べると、「心の明るさ・体の健やかさ・人と人の愛の和やかさ」から創られる「有り難い」という実感となります。そして、この三本柱(心・体・愛)には無限の尊さがあり、その向上に比例して幸福感も高まるのです。但し三本柱の一つでも欠如すると幸福感は成り立たないため、必要不可欠の条件となっています。その「心と体と愛」の幸福観の内容を箇条書きにすると次のようになります。

- (1) ー 体の健康と生命の尊厳に関する幸福感
- (2) ー 生命に具わる苦悩解決の解放感と自在の創造心の幸福感
- (3) ー 自他の人格が共に大切に受け入れられる相思相愛の幸福感
- (4) ー 「自由自在と慈愛の心」と「健康な体」を万人が平等に享有されている「生命の平等愛」の幸福感

この四つの幸福感は個々によって表現が多様で不定であるが、全ての人に赤い血が流れているように共通して享受されている「幸福の根源」であります。因みに四つの幸福感の項目から(2)の「生命に具わる苦悩解決の解放感と自在の創造力の幸福感」について説明すると、ある記事からの事例で30才の男性が秩父の山奥で遭難して14日目で救助された体験の紹介です。彼は道に迷って沢に転落し、その際に脚を骨折して身動きが取れ難くなってしまった。その時、彼は絶体絶命の窮地に、不安で気が狂いそうになった。そんな中で、脚の骨折の出血を止める方法を必死に思い出して手当てをし、飢えは無我夢中で水や蟻やミミズと草を食べて凌ぎ、そして、限界に陥って自決したくなった時は、親や恋人の愛情が思い出されて、生きる力を与えられ、俄かに命を繋ぐのであるが、生存能力の限界の中で、心身に不思議な生命力が働いて生きようとする。この様に、その時の智慧や力の根源を「生命に具わる自由自在の創造力」と云うのです。是れは、知識が心を動かしたのではなく、生命力が知識に結び付けたのです。生命力は限界の境地の時にはあらゆる事に働いて身を守ろうとする能力が具わっています。故に、この不安の中でも、その時、その場を切り抜けた時には生命感の安心の喜びが湧き、救助された時は感動の幸福感で溢れるのです。是れも生命の本能です。人間は生命の法則の元で創られ、生命の法則の環境で生まれ、そして、生命の法則に則って死するのです。つまり、生命の無限のシナリオの中で生かされ、その中に生命の幸福感が含まれています。それを人体に例えれば、寿命の期間の中で、人体機能の働きによって生活をし、若しその体の機能を無理すれば病気に成り、大切にすれば、健康で体の幸福感を得られると云う事です。

幸福感は生命の育みからの教示として、人間を教授している「生命愛」と云えます。

4.2 幸福観の倫理と質

次に、個人の幸福が交わる「社会の幸福観」を仏教思想から説明します、先に、仏教思想から現代社会の「物の豊かさ幸福観」を観ると、その幸福観が社会問題の原因の中に何等かの形で関係しており、そこに「幸福観の迷妄」が見受けられます。例えば、幸福を物やお金、官能など享楽感に求めるために経済重視の考え方に走り、物事の善悪を損得で判断して、利益に成らない事は不合理としてカットされる傾向が多々あります。それは、ニュースでも報道される様に、企業の不正な取引など、人間性を誤らせる事に結び付いています。又、その考え方は「自己中心の幸福」を社会に詰め、自分の利益に値しない事は他人の様に「無関心」になります。現に、その様な人が多く見られ、孤独死や自殺など多発しています。マザー・テレサ聖女は述べています。「愛の反対は憎しみではなく無関心である」と。幸福の最も大切な条件の「愛」が失われる事は人間社会の危惧であります。この様に「幸福観を誤る」と人間不信、社会不安、紛争、貧困、格差社会、自然破壊等々、広く社会に悪影響を及ぼす事を深く自覚せねばなりません。そのために、個人の自由だと主張して幸福観を無闇に放置せず、一定枠の「幸福観の質と倫理」が「幸福社会」には求められます。この条件を仏教思想から提示すると次の内容になります。

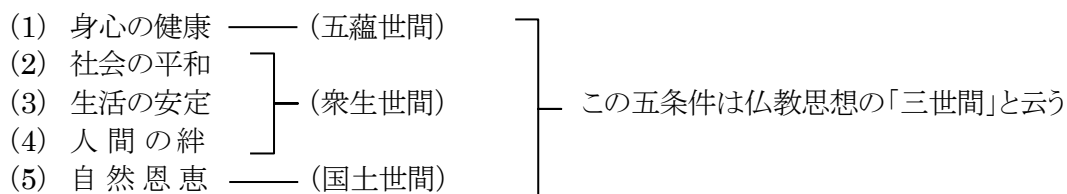
- (1) 全ての生命を傷付けない幸福(不殺生)
- (2) 他人に迷惑を掛けない幸福(モラル感)
- (3) 自他共に喜び合える幸福(共有＝共感)
- (4) 人間性が損なわない幸福(人格)
- (5) 今も後も喜ばれる幸福(不易性)

個人と社会は相関関係です。故に個人の幸福観は自分の人生の生甲斐だけですまず、社会市民の幸福にも影響を及ぼします。故に、五つの条件は「自他一如」で自分と他人を大切に配慮し、且つ社会に深い愛を培うものです。五項目の中の(3)の意義を説明します。その項目の中に「自他共に喜び合える」と記していますが、それは「他人を受け入れられる心」を持たなくては成立しない事になります。例えば、スポーツ競技で応援している選手が勝った時、選手とファンは喜び合えますが、仮に相手の選手が勝った時、相手選手にも祝福出来るかと云うこと迄、解釈されるのです。選手同志はお互いにベストを尽くしたのであり、どちらも祝福される資格があります。この問題は、「平和社会」や「分か

ち合い社会」を創る上で重要な問題になります。そこで、探求すると「自他共に喜び合える心」の根源は「愛の本質」にあります。「愛の本質」を探究すると、他人を愛するには先に「自己祝福」が出来ているかが問われます。それは「自己嫌悪」している人は、自分の心が他人にも写って「人間不信」に陥り易く成るからです。それで、「自己祝福」する為には自分の欠点を理解して解決する必要があります。それは、自己を嫌悪する原因に自分は欠点を解決できないと云う「罪の意識」が作られるからです。その「罪の意識」の解決は、目次3・3で説明した「生命と仏法から教示する幸福観」の中に、人間に享受された「生命の力と愛」を貴方にも持っている事を自覚する事です。それを仏教で「仏性平等」と云います。それに依って、自分を信頼出来た時、「自己祝福感」が他人を愛せる様に成ります。それは、他の人々の心の中に仏性を見る事が出来たからです。そこに「自他一如」の愛が出来ます。他人を愛せば「自己祝福」が強まり、他人を憎めば「自己祝福」を傷付ける。故に、相手選手にも祝福する様に成るのです。それが深まると、人間だけでなく、動物も植物も大自然にも生命の美と愛を感じられる様に成ります。「ペットの愛」が自分を幸福にしてくれる。「美しい景色」が心を潤してくれると云うように、「自他共に喜び合う幸福」とは、地球上の一切を幸福に化す「共有の幸福観」であります。それを仏教では「一念三千世界観の浄土」と謂います。この様に「幸福観の質と倫理」は「幸福社会」を実現する為の重要な指針です。そして、この幸福観の質と倫理は経済社会にも当て嵌まり、「ステーキホルダー」や「パレード基準」の重要性を共有しています。

4.3 仏教思想の幸福社会像

人と人の共同体である「社会」と云う器の「幸福社会像」を仏教思想から考察すると、「幸福社会像」は全ての地球市民の幸福を作る重要な設計図と成ります。そこで、先に幸福実現に必要不可欠の条件を提示します。



この五条件は一つでも損じると人間の幸福観は崩れるのです。故に、「幸福社会像」の中に組み込んで考究しなければなりません。その意味からも、「幸福社会像」は人間社会の羅針盤とも云えます。そこで、「幸福社会像」を仏教思想はどの様に教示しているのかを説明すると、仏教の幸福社会は「仏の功德の世界」といって「四徳波羅蜜」の「常楽我浄の世界」であります。この「常楽我浄」は「四念処」の「身・受・心・法」と比較させたもので次のようになります。

「四念処」を現象世界に^あて^は嵌めて考えると

- (身) — 身体は病んで死んでいく「命は常になし」である。
- (受) — 身体が生きて行く環境は苦勞で「楽ではなし」である。
- (心) — 心は自由に成らず、境遇に縛られるので「自由意志はなし」である。
- (法) — 心の環境は我見我欲の歪んだ社会で「浄だけではなし」である。

この現象世界の実態に即して「善の理念」を確立したのが、現象世界を悟った法則に基づく「諸法実相」の「常楽我浄」です。それを現代的に解釈すると次のようになります。

- (身) — (常) — (体 の 理 想) 身体健康と生命の尊厳を実現した社会
- (受) — (楽) — (体の環境の理想) 生命を守る経済と医療福祉と自然環境を実現した社会
- (心) — (我) — (精神の理想) 幸福実現の自由自在の創造心と生命の平等礼讃の生命愛の精神を実現した社会
- (法) — (浄) — (精神環境の理想) 精神世界を創造出来る平和政治と文化世界を実現した社会

人間社会の幸福はこの四項目の基本に基づくもので、先の幸福必要不可欠の五条件にも当て嵌まり、この中の一つでも欠如すると円満な幸福社会は実現できなくなります。そして、この内容で云わんとしている事は「個人(心身)と社会」の幸福は表裏一体の如くであり、且つ相乗関係であると言う事で、仏智の「個即全体」なのです。その理由は、社会の幸福を創る為の支えと成るのは、一つは人間が社会を創り、人間が幸福を判断するのであるから、先ず、個々の「心と体」を「幸福人間」にする必要がある事、二つは、社会は一人ひとりがお互いに共有して生活をする場であるから、「一人は皆の為に、皆は一人の為に」と「共生愛」を実行する必要があります。つまり、「幸福社会」の実現は「健全な心と体」と「利他の愛」を兼備した幸福人間が「健康・平和・生活・人の絆・自然愛」を社会に培って行く事です。

「個人と社会」は「森の植物と動物の関係」にあります。残念ながら、現在の世界に於いては実現されていない国が多く見受けられます。しかし、人類が、「地球は一つの共生生命体の家族愛」を忘れない限り、必ずや実現に向かって育まれて行くでしょう。

4.4 仏教思想の幸福経済

次に、「仏教思想の幸福社会」を更に具体的に理解する為に「仏教経済」を取り上げます。「仏教経済」は一言で「敬天愛人」に基づく「三方好し」の経済と云えましょう。「三方好し」とは「作る人・売る人・使う人」の三方が、皆良い関係の「ステーキホルダー」で治まる事です。そして、経済に携わる人の働きは「大衆の生活を賄う愛行」と云えます。その意味で「仏教経済」は「四無量心」の愛の仏智を基に考えられます。「四無量心」とは「慈悲喜捨」の四道の愛の教えで、それを基に「仏教経済」を説明します。

- (慈) — (自分が他人に親切する愛)
「相互扶助の共存共栄」の分配
- (悲) — (自分が他人に迷惑を掛けない愛)
「安全・無公害・非暴力・少欲知足の持続可能な生産と消費」
- (喜) — (他人の親切に感謝する愛)
「感謝の愛施に依る「分配」と報恩の「社会貢献」
- (捨) — (他人の過ちを許す愛)
「反省と改善の保全と再生」

そして、経営者の倫理は「煩惱の三毒」を基に

- (貪) — 我欲我見に執着しない。
- (瞋) — 殺生、搾取、争い等生命を傷付けない。
- (痴) — 道理の遵守(人間愛、自然摂理、モラル)

以上の倫理を実践して「四無量心」経済を社会に普及するのが、「敬天愛人」の仏教経済社会であります。

それを、現代社会に理念として内容を提示すると次のようになります。

4.5 仏教思想の地球市民経済理念

仏教思想による経済理念は、地球市民の為に、経済社会の現状、及び歴史を通しての教訓と自然と生命体からの教示及び人類の祈りを仏教思想の観点から考案したものです。

① 地球家族愛の共生経済

全ての生命の源を辿れば、生命が発生した地球は、全生命の母胎であり、生命構成要素である蛋白質を作る遺伝子暗号の「A・C・G・T」、及び宇宙の始まりに大爆発で発生した水素原子など同一の要素を内在した兄弟の生命である。

それが、相互に生かし合って生命体が営まれている世界を觀た時、人類は家族愛の慈悲を以って「地球を全生命の心地良い住まい」にすべき「地球家族愛の共生経済」を考究しなければ成らない。この理に基づき、個人や国民の枠を超えて、人類を「地球市民」と名称した。

② 地球市民の共有思想

「地球を全生命の住まい」とする限り、宗教及び心の拠り所の思想を共有する必要がある。その為に、地球上に存在している全ての生命が尊い生命の存在である事を深く理解して「万人、万物の存在価値を平等に敬う」事を基本に「万人の不殺生、非暴力」と「万物への供養と慈悲」を尊重した宗旨を第一義とする。故に仏性の「平等と礼賛」を重んじる。

③ 地球市民の社会共通資本

地球市民の生存に必要不可欠な自然の恩恵や社会システム及び、その他一切を含めて「地球市民共有の社会共通資本」として確立し、決して権力や財力で乱用及び利用してはならない。

④ 地球母胎の経済政策

地球市民の経済政策は、地球の生産能力に応じて「持続性と公平平等と生命愛」を基本に計画する「心が充足したシンプルライフ」(少欲知足経済)である。それに依って、人間の精神に「万物に対する尊厳と愛」が深まり、それが万物の生命を大切に扱い、且つ万物の価値能力を創意工夫して活かし切る生命愛の経済の道と成る。それは、最小限の消費で最大限の幸福を、目指す「心の質の高い地球愛経済」である。

⑤ 生命の教示に基づく営み

自然や人体の生命の摂理からの教示に基づいての生活様式と、それを営める経済社会を創造する事は「人間の生命」と「自然の生命」にとって最適な生き方である。そして、それが生命の営みの為に「命と労を捧げた愛恩」に対しての「供養と報恩行と環境保全」と成り、「生活・社会・自然」の一連の循環の最適な形で維持できる。

⑥ 蘇生と共生の経済の補完システム

地球市民が公平、平等で持続的に平和で安定した暮らしを実現するには、世界全体で偏り、不足を補完し合う「相互の蘇生と共生の経済システム」を敷く必要がある。

⑦ 経済人のモラル

地球上の万人、万物は、地球一家族の生命体として、諸法実相の皆の命を輝かす共生愛の恩恵を賜って生かし合っている。その事を理解した時、「経済人モラル」として、節度を弁えない「欲望と我見」に執着する事は戒めるべきである。そして享楽重視の「貧りと執着と競争」から精神性重視の「施しと知足と共存」の地球市民経済社会に変革すべきである。それに依って、暮らしと社会に「利他心と持続性と平等心」が育まれる。

⑧ 経済発展進歩の倫理

経済の発展や進歩は、自然や生命の摂理に基づいて、地球市民の全ての生命と暮らしの、「平和・健康・人権・安定」と「自然及び生態系との共生と持続性」を妨げては成らない。この倫理を遵守して「技術革新・生産・流通・消費」を考究し、人類の幸福と地球生態の保全を計る。

⑨ 経済の幸福観

人間の真の幸福は、物質、金、科学技術だけでは計れない。その事物・事象に「感謝・知足・健康・分かち合い・向上」の精神が宿ってこそ「人間性の質の高い幸福」と「自他共に共有出来る幸福」が得られる。地球市民経済は、この理念に基づいて、労働者、経営者、消費者の「三方好し」の幸福経済を築くのである。

⑩ 社会保障の経済

地球市民経済は、人間社会の貧国・格差の拡大・不平等など弱者の生活環境条件を解決出来る「分かち合い社会」の「社会保障を充実した経済」でなければならない。その為に経済利益は、「一切の愛恩」に感謝して、世の為、人の為に役立たせる必要がある。それに依って、利益は、人体の血液の循環の如く、社会に健全な循環を作り、それが経営の誇りと繁栄に結び付く。

⑪ 人間性重視の経済

経済優先の社会は、利益第一に走り、労働が人間の肉体と精神を酷使したり、又、経済モラルの低下等々、人間性を損なわせることが生じている。

それが、心身の健康・家族の絆、社会秩序の荒廃、貧困・紛争、自然破壊等々の問題に結び付く。故に、経済は人間の幸福を創るために経済の本来の目的を正して、蘇生に心掛ける事である。経済の為に人間性を無視してはならないのである。

以上、「敬天愛人」に基づく「四無量心の仏教経済」を理念として提示しました。

その意味から、現在の経済社会の「人間性軽視の傾向」は誤りであります。人間は経済の為に生きているのではなく、人間の為に経済があるのであり、本末転倒しています。その因果応報の結果が現在の世界の問題を生じさせています。故に、人間は幸福を追い求める前に不幸の原因を反省して蘇生させる事が、幸福への道に繋がります。その経済を根本から見直す羅針盤として「仏教思想の幸福経済」が灯明と成る事を切に祈ります。

4.6 まとめとして

仏教思想の「個人と社会の幸福観」を述べましたが、是れは「仏の成就と仏国浄土」の一連の誓願で切り離せないものです。つまり、個人の幸福は社会が幸福で成れば実現しないし、社会の幸福は個人の幸福を創れる社会で成れば幸福な社会とは言えないと云う事です。前に述べた「森の植物と動物の関係」です。この幸福観を考究する時に仏教思想が用いられる事は大切な意味を持ちます。それがないと幸福観の指針が判らず、幸福観を誤る事に成ります。それが、現在の不幸な社会問題を作る事に繋がるのです。そして、この儘進めば、人間社会だけでなく、地球の自然が壊され生態系全体も危くする可能性があります。正に、今ここで転換の急を必要とされている中で、私達が考えなければならない根底として、「幸福とは何か」と「実現にどう取り組むのか」が課題です。その時に、「持続可能な経済」を例に上げれば、「持続可能な経済」は「量・数・機能」の物質の問題だけではなく、持続可能を作る「心の質」が必要であると云う事です。つまり、質の高い「物心一如」です。それに依って中道になった時に、地球を「幸福な住まい」にする持続可能な経済と成ります。それは、生命愛に基づく「少欲知足経済」にも繋がり、その極め着く先は、「物の理」の上に「心の理」を深めた仏教思想を、経済に用いる事に依って、経済が「人や万物の命の輝き」(成仏)を放ち、掛け替えのない幸福観を得られる経済社会となります。その意味で、「仏教思想の幸福社会像」を提示する事は大事な使命であります。その実践者の一人として、道元禅師の有名な歌を紹介します。

「杓^{しゃく}底^{てい}の一残水^{いちざんすい}、流れを汲む千億人」 (道元禅師)

これは、道元禅師が谷川の水で生活をしていた時、杓子に残った僅かの残り水を元の谷川に戻した際、「何故、わざわざ谷川へ戻すのか」の弟子の質問に答えた歌です。修行僧の心得として「命の大切さ」と「生活する人への思いやり」を歌ったもので、「生命愛の少欲知足」の精神であり「持続可能

な経済」の魂でもあります。ここに「仏教幸福経済社会」の「幸福観と実践」が見事に示されています。

(完)

まとめ

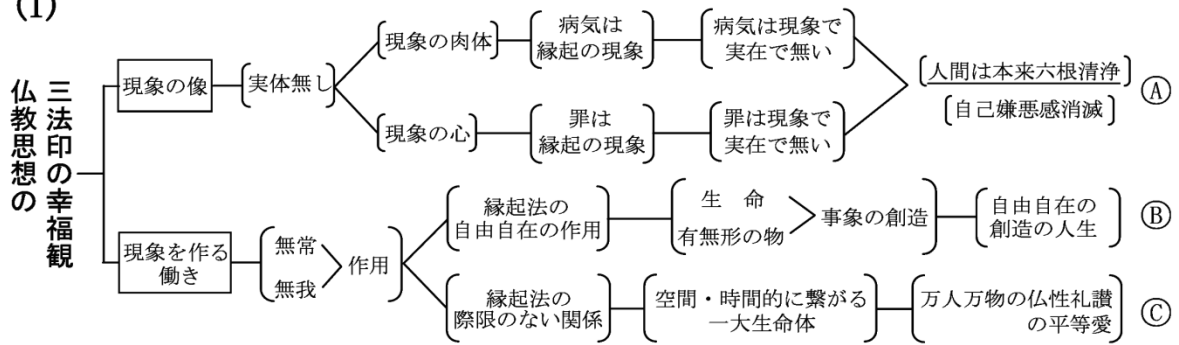
本編の全編にわたって述べた内容を、わかりやすい図式にして次ページに提示致します。ご活用いただければ幸いです。

この図式は仏教が説く三法印の悟りをもって、現代社会を一步でも人間本来の幸せな社会に導くための道程が示されています。

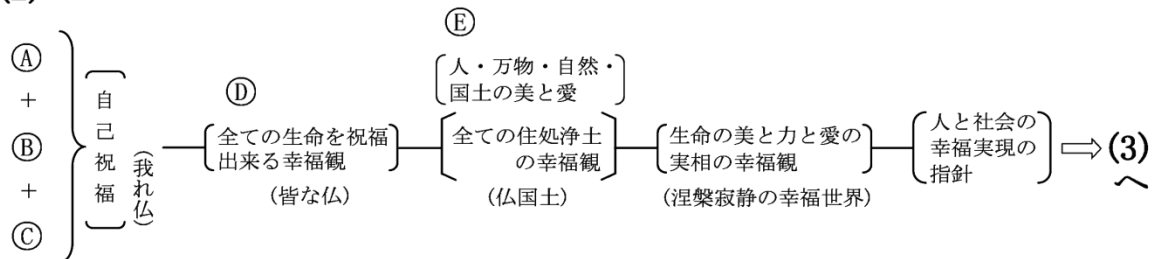
(1)で自己祝福観(小乗)から(2・3)でこの地球が平和浄土顕現(大乘)にいたる過程がご理解いただけたと思います。

世界のすべての人類がこのことを実践を通して学んで、自分自身の命の素晴らしさを自覚し、その事が全ての生命への愛に広がり、そして、今、此の所に生命の輝きを育んでいる幸福が存在することを開顕して、明るい未来を確信して頂きたいのです。御仏の大いなる慈悲に導かれて、「全ての地球市民が速やかに笑顔に包まれて輝く」ことを一心に祈願致します。

(1)



(2)



(3)

